

The Molecular Biology Society of Japan

MBSJ NEWS

日本分子生物学会

2012.2

No.101

会報

目次

■ 第1回(2013年)日本分子生物学会 国際会議支援 募集のお知らせ	1
■ 分子生物学会による、国際会議支援システム (参加登録～演題受付～カード決済 / Web 運用) 利用について	2
■ 高等学校との連携による社会貢献活動について	2
■ 日本分子生物学会第12回春季シンポジウム 「トランスレーショナル分子生物学 ～新世代への知の継承～」のご案内	3
■ 第35回(2012年)日本分子生物学会年会 開催のお知らせ(その1)	5
■ 第34回年会開催のご報告	10
■ 第34回年会・男女共同参画企画 ランチョンワークショップ開催報告	11
■ 男女共同参画委員会・年会における発表者の属性統計調査報告	16
■ 研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告	17
■ 第17期第2回理事会記録	23
■ 平成24年度(第34回)通常総会記録	32
■ 平成23年度(2011年度)収支決算報告	36
■ 監査報告書	41
■ 平成24年度(2012年度)収支予算	42
■ 学術賞、研究助成の本学会推薦について	43
■ 研究助成一覧	43
■ 各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ ○第7回トランスポーター研究会年会 ○The 9 th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference (APMBC2012)	46
■ 第17期役員・幹事・各委員会名簿	48
■ 賛助会員芳名	49



特定非営利活動法人
日本分子生物学会

<http://www.mbsj.jp/>

21世紀の分子生物学

A5判 2色刷 288ページ 定価3360円 → **会員特価 2850円** (送料・税込)

新刊

各分野の第一線で活躍する専門家が、最新の論文情報や知見も含めて易しく簡潔に分子生物学を概説。コラムを豊富に挿入し、鍵となった歴史的な発見や実験などにもふれます。分子生物学を志す学生の格好の教科書。



<生命の分子基盤> 細胞の構造と機能(大隅良典) / タンパク質の機能と動態(永田和宏) / 代謝調節と代謝病(門脇 孝) / 遺伝子とゲノム(小原雄治) / RNAバイオロジー(塩見春彦)

<生命の維持と継承> 代謝調節と細胞間情報伝達の分子機序(加藤茂明) / 細胞分裂(山本正幸) / がん(山本 雅) / 胚発生と細胞分化(近藤寿人) / 再生(山中伸弥) / 老化(石川冬木)

<生命のコントロール> 脳と神経(岡野栄之) / 概日時計(近藤孝男) / 植物科学の挑戦(島本 功) / 感染症と宿主免疫(小安重夫) / ゲノム創薬科学(辻本豪三)

分子生物学に魅せられた人々

四六判 縦組 232ページ 定価1680円 → **会員特価 1400円** (送料・税込)



創立 30 周年を期に、分子生物学が今日に至った道筋を、記憶の奥にしまいこまれてしまう前に記録することは重要と考え、日本の分子生物学の小史を書き留めることにしました。本書は、分子生物学進歩の臨場感を味わっていただけるように、我が国において分子生物学・分子生物学会の創立・発展に貢献した下記 14 名の方々に、現在第一線で活躍中の研究者がインタビューをし、まとめたものです。

富澤純一 / 岡田吉美 / 村松正實 / 志村令郎 / 吉川 寛 / 松原謙一 / 小川智子
堀田凱樹 / 柳田充弘 / 竹市雅俊 / 谷口維紹 / 岡田清孝 / 田中啓二 / 長田重一

なぜなぜ生物学

新書判 縦組 202ページ 定価1470円 → **会員特価 1250円** (送料・税込)

中学生・高校生とその家族、あるいは生物を専攻しなかった社会人の方々がふと思う「いのち」にかかわる「なぜ？」について、分子生物学の最先端で活躍している研究者が対話形式でやさしく答えます。「いのち」の不思議を解く面白さを一人でも多くの人に知ってもらい、次の時代の分子生物学を担う若者の参入を期待します。



<目次> 遺伝子とパソコンソフトはどこが違うの?(五十嵐和彦) / なぜ肥満と痩せになるの?(島野 仁) / なぜ親子は似るの?(正井久雄) / なぜ癌になるの?(花岡文雄) / どうして心臓は左にあるの?(松崎文雄) / 雄と雌ってなにが違うの?(諸橋憲一郎) / どうして毎年のようにインフルエンザに罹るの?(永田恭介) / なぜ地球環境にいいことをグリーンというの?(篠崎一雄) / ケガをしてもちゃんとなおるよね!(阿形清和) / クジラはどこから来たの?(岡田典弘) / 組換え食品は安全なの?(渡辺雄一郎) / 細胞の中って見えるの?(永井健治) / 薬はどうやって創るの?(吉田 稔)



**会員は、東京化学同人への直接注文で
上記の会員特価で購入できます!!**

- ・東京化学同人ホームページ上の申込用紙をご利用下さい。
- ・書店・大学生協等では扱いません。
- ・海外への送品は実費請求となります。

第1回(2013年)日本分子生物学会 国際会議支援 募集のお知らせ

このたび、本学会では、2013年に開催計画のある国際会議より、年2～3回の支援(開催補助金の助成)を行っていきることになりましたので、お知らせいたします。

科学のグローバル化が進む一方で、国際会議を通しての情報の交換は科学の大きな必須手段の1つとなっています。しかし、日本で開催される質の高い国際会議の数は増えていない状況があります。また、関連分野の最新の研究に若い時から接することは優秀な研究者を育てる上で要の1つと考えられます。本支援は、日本(あるいはアジア)発の originality の高い国際会議を育て、若手研究者をサポートすること、日本発の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的として、立ち上げました。

本国際会議支援(開催補助金・助成)を希望される方は、下記の要項に従って、ふるってご応募ください。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

理事長 小原 雄治

国際会議支援・選考委員会 委員長 西田 栄介

■募集要件

1. テーマ: 分子生物学の分野ならどのような分野でも可-新しい領域、外国では見受けられないユニークなテーマが望ましい。
2. 開催規模: 参加人数は50名以上200名程度までとし、そのうち外国からの参加者が少なくとも20%程度いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式:
 - 1) 分子生物学会会員が主催者あるいは共同主催者であること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除きます。
 - 2) 共催: 他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格(特に学生会員を考慮されたい)が設定されていることが望ましい。
4. 留意事項:
 - 1) できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。
 - 2) 本学会年会のサテライト会議(年会会期前後または近い時期での開催。開催場所は問わない。)とすることが望まれるが、他の時期・場所での開催も可能である。
(* 2013年(第36回)年会は、12月3日(火)～6日(金)の会期で、神戸ポートアイランドにて開催されます。会場の設営準備日(2013年12月2日)については、神戸国際会議場を通常より安い費用負

担で使用できる可能性があります。学会HP/ 来年以降の年会を参照ください。<http://www.mbsj.jp/meetings/annual/annmeefuture.html>

- 3) 会議開催に際しては、分子生物学会が用意している支援システム(JTB西日本による国際会議トータル支援システムを長期契約のもとに割安価格で使用)、①基本システム代金: 23万円(事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定)、②オプション/メインHP代金: 25万円(全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ヶ月・更新メンテナンス12ヶ月)、③オプション/オンライン査読システム: 8万円、④オプションその他、のうち 基本システム①を必ず使用することを応募条件とします。
- 4) 支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議HP等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとします。
- 5) 残金が出た場合、補助金の返還を求められます。

■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり200万円～300万円。年間2～3件。開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

(補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとします。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、本学会への会計報告(収支決算書概要)提出の義務を有します。また、分子生物学会から支援を受けたことを、HP、要旨集などに明記いただきます。)

■応募方法

申請書は、分子生物学会ホームページからダウンロードして使用してください。

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、おおよその予算規模と使用用途等を記載し、学会へ提出してください。

■申請書送付先

〒102-0072

千代田区飯田橋2-11-5 人材開発ビル4階

日本分子生物学会 国際会議支援・選考委員会 御中

TEL: 03-3556-9600

E-mail: info@mbsj.jp

■締切期日 2012年7月31日(火) (必着)

■スケジュール (開催補助金の交付)

原則として2年前に公募を行います。2013年開催の会議支援は、本支援事業の導入初年度であるため、会議開催の約1年前に助成金を交付します。

- 2012年7月31日：応募締切
- 2012年8月：選考
- 2012年9月下旬：補助金の交付 (予定)

■選考

国際会議支援・選考委員会が選考に当たり、理事長承認のもとに決定します。

国際会議支援・選考委員会

西田栄介 (委員長)、篠原 彰、杉本亜砂子、月田早智子、三浦正幸

分子生物学会による、国際会議支援システム (参加登録～演題受付～カード決済 / Web 運用) 利用について

分子生物学会では、日本発の国際会議を学会が支援するために経済的支援を行うことに加え、国際会議を開催する研究者の事務的な負担を減らすため、支援システム (JTB 西日本による国際会議トータル支援システム / Web 運用) をご用意いたしました。国際会議支援の詳細は公募要項の中にも書かれているとおりでありますが、同支援事業の応募とは別に、システムのみを使用されたいとの希望者につきましては、分子生物学会の会員であれば同額での利用が可能ですので、ここにお知らせいたします。

システムのみを使用されたい場合は、学会事務局 (分子生物学会 国際会議支援システム・システム利用係り E-mail: info@mbsj.jp) まで E-mail にて、開催概要と連絡先を明記のうえ、お申込みください。(一旦、学会を経由してから、JTB 西日本の担当者をご紹介します)

《支援システムの概要》

本学会が JTB 西日本と長期契約を交わしたことにより、JTB 西日本による国際会議トータル支援システムを通常より割安価格で利用できます。

- ①基本システム代金：23万円 (事前参加登録受付・演題投稿受付・クレジットカード決済等の基本システム設定)
- ②オプション / メイン HP 代金：25万円 (全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理 12ヶ月・更新メンテナンス 12ヶ月)
- ③オプション / オンライン査読システム：8万円
- ④オプションその他、が利用できます。(メニュー詳細については、一旦、学会を経由した後、JTB 西日本の担当者が説明いたします)

なお、この支援のみを受ける場合も、分子生物学会の支援 (システム利用) を受けたことを当該会議の HP、要旨集などに明記いただきます。

高等学校との連携による社会貢献活動について

来年度から新学習指導要領がスタートし、高等学校での「生物」の授業には分子生物学の内容が多数盛り込まれる予定です。そのため高等学校の生物学教師の方々は、これら新しい内容をどのように教えて行くか、その対応を模索しておられます。

昨年12月12日に開催された第17期第2回理事会では、最先端の分子生物学の情報を、将来を担う高校生に普及することは科学者の役割として重要であると考え、

学会員による高等学校教師等を対象とした講演会、出張講義等を支援する体制を作ることが決議されました。今後、このような活動に参加していただける方をアンケートで募り、データベースの作成、HP等での公開を進めたいと考えています。高等学校側とも協議して支援ネットワーク形成を進めますので、会員の皆様のご協力をおねがいたします。

日本分子生物学会第12回春季シンポジウム

「トランスレーショナル分子生物学～新世代への知の継承～」のご案内

2012年の春季シンポジウムは、桃花の季節の山梨で、1泊2日の合宿形式で開催いたします。

今回のテーマは「トランスレーショナル分子生物学」としました。「トランスレーショナル」とは、「ベンチからベッドサイドに知見を繋げる」といった意味で最近、医学分野で使われている用語ですが、ここでは、「参加された方々に、学んだ知見を受け継いでいただき、分子生物学の担い手として、これをさらに発展させていただきたい」という主催者の思いをこめました。これをふまえ、講師には、若い研究者の範となるような分子生物学のトップランナーの方にお願しました。

2009年の小原現理事長が主催された年会では「分子生物学会の原点～すべては議論から～」と題し、本会の初期の熱気ある雰囲気復活を目指されたと伺っています。今回もこの精神を引き継いで、参加された皆様が2日間にわたり議論をかわし、その過程を通じて、研究上の知己を見つけて帰っていただけたら、と考えている次第です。

この趣旨を汲んで、分子生物学を熱心に学びたいと考えている方々の積極的なご参加をお待ちしております。事前参加登録およびポスター発表の申込を受け付けておりますので、第12回春季シンポジウムサイトよりお申し込みください。

<<http://www.mbsj2012.umin.jp/>>

※東日本大震災の被災地から参加される学生の方については、参加登録費と旅費(往復5万円まで)を分子生物学会が負担します。第12回春季シンポジウム事務局までお申し出ください。

【春季シンポジウム】

テーマ:「トランスレーショナル分子生物学～新世代への知の継承～」

会期:2012年4月25日(水)～26日(木)

会場:慶山(山梨県笛吹市石和町)

参加登録費:相部屋(学生)→5,000円

相部屋(一般)→10,000円

シングル→15,000円

参加登録費には、宿泊代(朝食付き)、昼食代、要旨集代が含まれます。

25日(水)の夕食・懇親会には無料でご参加いただけます。

プログラム:

基調講演 一條 秀憲(東京大学)

「細胞がストレスを感じるシグナル伝達の仕組みと疾患」

石野 史敏(東京医科歯科大学)

「ゲノムインプリンティングから見えてくるものー哺乳類の個体発生と進化ー」

招待講演 上川内あづさ(名古屋大学)

「脳の中の聴覚神経回路を探る」

鈴木 洋(東京大学)

「拡大する小さなRNAの世界」

有田 誠(東京大学)

「脂質メタボロミクスによる炎症の制御機構の解析」

柳澤 純(筑波大学)

「核小体による代謝制御」

堀家 慎一(金沢大学)

「高次遺伝子発現制御機構へのブレイクスルー」

東田 裕一(九州大学)

「細胞の記憶を消すメカニズムークロマチンのメチル化修飾制御機構ー」

岩里 琢治(国立遺伝学研究所)

「幼仔脳における神経回路の発達ーマウス体性感覚野(バレル野)での研究ー」

赤松 和土(慶應義塾大学)

「多能性幹細胞から神経幹細胞を生み出す分子機構とその応用」

大隅 典子(東北大学)

「脳の中の幹細胞」

石川 俊平(東京大学)

「細胞間相互作用のシーケンシング」

若菜 茂晴(理化学研究所)

「マウス全遺伝子機能解明プロジェクトとマウスクリニクーマウス表現型解析の標準化への潮流ー」

若山 照彦(山梨大学)

「自分の土俵ー餅は餅屋で世界一を目指せー」

【市民公開講座】

テーマ：「からだと健康を知る最先端の技術」

日 時：2012年4月21日(土)14時

会 場：コラニー文化ホール

参加費：無料

講 演：倉永英里奈（理化学研究所）

「からだの形づくりを視る技術の最先端」

菅野 純夫（東京大学）

「個人ゲノムでかわる医学研究」

世 話 人：久保田健夫

（山梨大学大学院 環境遺伝医学講座・教授）

組織委員：宮澤 恵二

（山梨大学大学院 生化学講座第2教室・教授）

黒澤 尋

（山梨大学大学院 生命工学科・教授）

事 務 局：〒409-3898 山梨県中央市下河東1110番地

山梨大学大学院医学工学総合研究部環境遺伝
医学講座

（事務局代表：平澤 孝枝・講師）

TEL：055-273-9557 FAX：055-273-9561

E-mail：envirom@med.yamanashi.ac.jp

第 35 回日本分子生物学会年会 開催のお知らせ (その 1)

年会の新しいスタイルを模索する

会 期：2012 年 12 月 11 日(火)～ 14 日(金)
会 場：福岡国際会議場・福岡サンパレス・マリンメッセ福岡
年 会 長：阿形 清和 (京都大学大学院理学研究科)
演 題 登 録 期 間：2012 年 8 月 1 日(水)～ 8 月 27 日(月)*
事前参加登録期間：2012 年 8 月 1 日(水)～ 10 月 31 日(水)*
*サーバーメンテナンス等の関係で多少前後する可能性があります
年会事務局連絡先：第 35 回日本分子生物学会年会事務局
〒 100-0013 東京都千代田区霞が関 1-4-2 大同生命霞が関ビル
日本コンベンションサービス株式会社内
TEL：03-3508-1214 FAX：03-3508-1302
E-mail：mbsj35@convention.co.jp
年会ホームページ：http://www2.convention.co.jp/mbsj2012

【年会のコンセプト】

第 35 回の年会は、

- 生化学会とは分離・単独開催となります (生化学会は同じ会場で時期をずらして (12/14～16) 開催されます)。生化学会と分離・連続開催となるので、分子生物学会のアイデンティティが問われる年会となります。分子生物学会に発表するんだ - という高いモチベーションをもって奮ってご参加ください。
 1. 特に、以下にあるようにワークショップは全て一般会員から公募しますので、意欲的に参加願います。
 2. 学生会員は、引き続き開催される生化学会に別途登録費を払わずに参加することができるようにしています。今後の分子生物学会と生化学会との合同開催について考える機会にしてください (やがて諸君らの世代が学会の主力になっていくのですから)。
 - 学会は自分の研究を発表するとともに、発表することで他の会員からのフィードバックを受けることが大きな目的とします (もちろん、新たな情報を収集することと、他の会員との交流を楽しむことも重要です)。今回は (自分の研究を話す) 年會を重視し、①シンポジウムは各時間帯に 1 本だけ立て、後は全て一般公募のワークショップとし、一般会員が発表する機会を増やします。また、②ポスター発表についても全てショートトークをするようにしますので奮って応募ください。
 - 各時間帯に 1 本だけ立てるシンポジウムについては、組織委員会の方で企画しています。会員が整理して聞きたいトピックスやフロントの話しを解説つきで聞ける、あるいは学べるように工夫しています。例えば、non-coding RNA 研究のフロントでは何が焦点になっているのか、そういったことを知る企画を考えています。
 - これからの学会をより有効に楽しむために、IT 化をすすめ、スマートフォンや iPad を使ったプログラム検索、短い発表内容からは得られない周辺にある情報もまとめて収集できるようなシステムの構築をめざしています。分子生物学会にしかできないような「IT 化」を実現し、将来の年会モデルを構築するのが本年会のミッションであると考えています。年会 Website を使用し、会員の皆様からも IT 企画のアイデアを募集させて頂く予定となっておりますので、積極的にご応募ください (詳細は別紙 年会チラシ裏面をご参照ください)。
- Face to Face で議論し、様々なカルチャーから受けた新しい刺激をフィードバックできるような年会を目指します。

【セッション構成 (予定)】

◆シンポジウム

各時間帯に 1 本のシンポジウムを予定しています。コンセプトでものべましたように、フロントサイエンスを聞く機会になるよう企画しています。現在調整中のシンポジウム概要は随時更新します。最新の情報については年会ホームページをご覧ください。

遺伝子発現制御研究：エピゲノム時代、そしてゲノムトポグラフィー時代の到来

オーガナイザー：塩見春彦（慶応義塾大学）

山中4因子によるiPS樹立の成功は、強制的にトランスクリプトームを変えることで細胞の運命を変えることができることを明確にした。解析技術の急速な進歩により、ゲノム全体にわたって、どのようにヌクレオソームが構成され、それらがさらにどのようにパックされ、そして、それらが核内のどの位置に局在するかが明らかになってきた。さらに、トランスクリプトームの形成にmicroRNAや他の非コードRNAが大きなインパクトを持つことも見えて来た。本シンポジウムでは、1つのゲノムがどのように多種多様な、しかも個々の細胞型に固有のトランスクリプトームを生み出すかを明らかにするための最新の解析技術とそれらを用いて得られた成果から合成された新しいコンセプトを紹介し、次に来る遺伝子発現制御研究の新時代を展望したい。

生殖生物学・生殖工学の発展史とその最前線

オーガナイザー：斎藤通紀（京都大学）、東山哲也（名古屋大学）

多細胞生物において、生殖細胞は、個体発生能を有し、遺伝学的・後成遺伝学的（エピジェネティック）情報を次世代に継承する細胞系譜である。その機能を実現するため、生殖細胞の発生過程では、全能性獲得やゲノムインプリンティングに向けたゲノム・エピゲノム情報の編集が行われる。生殖生物学・生殖工学研究は、生殖細胞の機能や全能性制御の分子基盤を探求し、さらには生殖細胞の人為的操作による個体作出・個体遺伝子改変技術の開発・発展を推進しつつある。本シンポジウムでは、動物及び植物において本領域を築いてきた研究者と、生殖生物学・生殖工学の発展の歴史、最前線と今後の展望、その社会的影響を議論したい。

複雑システムの論理に迫る理論生物学

オーガナイザー：望月敦史（理化学研究所）、澤井 哲（東京大学）

分子レベルの情報に統合的理解を与える、或いはシステムの動態を定量的に捉える目的で、数理科学や計算科学などの理論的方法が、生命科学において一定の市民権を得るようになってきた。また生命システムのさらなる複雑さが明らかにされている一方で、医療や創薬への応用も求められている。今後は、複雑なシステムの本質的原理を明らかにし、その操作を可能にするような、より力強い理論が求められるであろう。本シンポジウムでは、実験と理論の組み合わせにより、複雑システムから本質的原理を抜き出す研究や、生命機能が創出される過程に迫る研究を紹介する。これら研究の将来の発展を考えることで、理論が生命科学における道具として機能する将来を見据えたい。

生体組織における細胞機能と情報伝達のイメージング

オーガナイザー：松田道行（京都大学）、宮脇敦史（理化学研究所）

蛍光バイオセンサーと二光子顕微鏡法の開発により、細胞機能や情報伝達が生きた組織で可視化できるようになった。今や、がん細胞が組織に浸潤する過程での情報伝達分子や細胞周期の変化、あるいは興奮に伴う神経細胞の形態や情報伝達分子の変化などが生きた組織でリアルタイムに観察できる。試験管内で蓄積してきた様々な仮説を生きた組織で検証する時代に突入したと言えるだろう。本シンポジウムが多くの研究者が蛍光生体イメージングへチャレンジする契機になることを期待している。

構造は機能を語るか？神経発生におけるシグナル授受のしくみをめぐって

オーガナイザー：山本亘彦（大阪大学）、高木淳一（大阪大学）

分子生物学の発展によって生命機能を分子の言葉で語る研究が爆発的に進行し、神経発生を担う分子機構に関する知見も飛躍的に増大した。しかしながら、遺伝学による新規分子の発見とノックアウト動物の表現型解析という旧来の手法だけでは、それぞれの分子が細胞において果たす機能を解明することに限界が生じており、より多様なアプローチが求められている。構造生物学は、分子構造からそのはたらきを解明する究極のツールとなるが、メカニズムの「確認」にはなっても「発見」にはつなげていないという批判もある。本シンポジウムでは、神経発生で重要な役割を果たす分子群についての最新の構造研究と細胞機能研究を通して、両者が融合する先に見えてくる次世代の分子生物学の姿を展望したい。

炎症の分子生物学

オーガナイザー：竹内 理（大阪大学）、有田 誠（東京大学）

炎症は刺激に対する免疫細胞を中心とした応答であり、サイトカインや脂質メディエーターなどを介して調節されている。また、炎症は感染に対する防御反応にとどまらず、動脈硬化やメタボリックシンドローム、癌を始めとした様々な疾患と深く関わっている。近年、炎症の惹起、制御の分子メカニズムが急速に明らかとなってきた。本シンポジウムでは炎症の惹起、調節、疾患との関連などのトピックスに関し、この分野の第一線の研究者から最新の研究成果を紹介したい。

◆ワークショップ（公募）

会員より一般公募します。1セッション（テーマ）あたり2時間～2時間30分の時間枠で、約140のワークショップを予定しています。応募要領は後述の【ワークショップの企画公募について】をご参照ください（公募締切：2012年3月30日（金））。

◆一般演題（ポスター発表、ワークショップ）

本年会では、できる限り口頭発表の機会を増やし、公募のワークショップ内で若手・学生による演題も多く採択したいと考えております。また、ポスター発表演題におきましても、アピールタイム（ショートトーク）を設ける予定です。詳細は後日、年会ホームページ（<http://www2.convention.co.jp/mbsj2012>）をご確認ください。演題登録の開始は8月1日（水）を予定しております。

◆バイオテクノロジーセミナー

応用研究を行っている企業によるランチョンセミナーを開催いたします。

◆市民公開講座

市民の方々を対象とした公開講座の開催を予定しています。

◆その他企画

【ワークショップの企画公募について】

年会では、ワークショップの企画を会員の皆さまより公募いたします。ご提案頂いた企画案の採否結果は、4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。

要項をご確認の上、テーマタイトルと下記事項1-6を、3月30日（金）までに年会事務局宛、E-mail（mbsj35@convention.co.jp）にてご提出ください。

◆ワークショップ企画：2012年3月30日（金）締切

〈応募要領〉

テーマタイトル（和文・英文）

1. オーガナイザーの氏名・所属（1-2名）
2. 概要（400字程度）
3. 予定演者の氏名・所属（応募時での演者による講演承諾は不要です。3-4名程度）
4. 該当する大項目1つ、小項目2つを以下から選んでください（選考の際に参考にします）。

大項目

- A) 分子構造・生命情報
- B) 分子・複合体の機能
- C) 細胞の構造と機能
- D) 発生と再生および神経科学
- E) 疾患生物学
- F) 研究方法、技法

小項目

「遺伝子・核酸・ゲノム構造」、「オミックス」、「ポストゲノム解析・バイオインフォマティクス」、「タンパク質立体構造」、「分子進化」、「糖・脂質」、「複製」、「組換え・修復・変異」、「染色体外因子—ウイルス、ファージ、トランスポゾン、プラスミド」、「転写」、「翻訳」、「エピジェネティック制御」、「RNAの機能・RNAプロセッシング」、「生理活性物質」、「核内構造および機能・ゲノム機能（染色体・クロマチン・核小体）」、「細胞質オルガネラの構造・機能・形成」、「細胞接着・細胞運動・細胞外基質」、「タンパク質のプロセッシング・輸送・局在化」、「生体膜・細胞骨格」、「細胞増殖・分裂・周期」、「シグナル伝達」、「アポトーシス」、「初期発生、形態形成」、「再生」、「幹細胞、発生工学」、「細胞・組織分化」、「受精、生殖細胞」、「脳、神経回路」、「神経発生、神経疾患・損傷」、「免疫」、「老化」、「がん」、「遺伝性疾患」、「DNA/RNA工学」、「タンパク質工学」、「ケミカルバイオロジー」、「病因解析、診断」、「システムバイオロジー」、「理論・モデリング」、「その他（具体的にキーワードを記入ください）」

5. オーガナイザーの氏名、連絡先（電話、E-mail address）

6. 予想される聴衆数

〈募集要項〉

- ・企画提案いただくオーガナイザー（1人あるいは2人）は、日本分子生物学会の会員に限ります。
- ・1テーマあたり2時間～2時間30分程度の時間枠で、約140テーマを採択します。
- ・オーガナイザーが推薦する講演者に加え、ポスター発表から希望者を募り、一般講演として3—4名をワークショップでの講演に必ず加えて頂きます（一般枠があるので、指定講演者の数は従来より少なくなります）。
- ・海外演者の招聘にあたり、年会からの旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、海外招聘演者の参加費は免除とさせていただきます。
- ・国内演者についても、旅費・滞在費・宿泊費の支給はありません。ただし、非会員演者の参加費は免除とさせていただきます。
- ・原則、海外演者がいる場合は「英語」で講演を行っていただきます。海外演者がいない場合は、使用言語はオーガナイザーに一任します。
- ・プログラム編成スケジュールが大変タイトなため、提出物等の締切厳守にご協力ください。

以下の点、年会の口頭発表の充実化を図るため、留意して頂ければ幸いです。

- ①発表内容は未発表であることが望ましい。
- ②議論の時間を十分に確保することが望ましい。
- ③同じグループのメンバーが異なるシンポジウムやワークショップで同じ内容で話すことを可能な限り減らすことが望ましい。
- ④講演者の男女の比率に配慮することが望ましい（昨年の年会の一般講演者の男女比は7:3でした）。

ワークショップの採択

従来の分野も採択しますが、分野をまたがるもの、斬新なワークショップの企画を歓迎します。また、新学術領域などの大型予算関連の企画は避けて頂ければ幸いです。

ワークショップの採択は分野間のバランスや昨年の年会の一般講演数の分布などを参考に決めます。組織委員指定のシンポジウムの数が限られていますので、また、一般口頭発表はワークショップの中のみになりますので、みなさまの積極的な応募をお待ちしています。場合によっては応募されたワークショップの統合を御願ひするかもしれません。ご提案頂いた企画案の採否結果と時間枠に関しましては、4月中旬頃に応募者へご連絡いたします。組織委員会／プログラム委員会に一任して頂ければ幸いです。

◆企画提出およびお問い合わせ先

第35回日本分子生物学会年会事務局

〒100-0013 東京都千代田区霞が関1-4-2 大同生命霞が関ビル

日本コンベンションサービス株式会社内

TEL：03-3508-1214 FAX：03-3508-1302 E-mail：mbsj35@convention.co.jp

【組織委員一覧】

年会長

阿形 清和 京都大学大学院理学研究科

組織委員長

諸橋憲一郎 九州大学大学院医学研究院

プログラム委員長

篠原 彰 大阪大学蛋白質研究所

プログラム副委員長

見学美根子 京都大学物質細胞統合システム拠点

財務・渉外委員長

小安 重夫 慶應義塾大学医学部

運営・庶務委員長

巖佐 庸 九州大学大学院理学研究院

第 34 回年会開催のご報告

第 34 回日本分子生物学会年会は、昨年 12 月 13 日(火)～16 日(金)の 4 日間、パシフィコ横浜で開催し、参加者総数 8,320 名を迎えて盛会のうちに終了することができました。

幹事会では早くから企画構想に着手し、これまでにないプログラム構成・企画を試みました。その柱となったのは、異なる分野の「One Day 研究集会」を 4 日間にわたって計 6 テーマ行、という全体会期構成案です。これは各日に同時並行させる 2 テーマを異なる分野とすることで、興味のあるプログラムの開催時間が重なっていて聴講できない等の不満を解消しながら、自分の関連分野のテーマ開催日のみの参加でも済むよう、多忙な参加者の利便性を図ったものです。また、プログラム面では、過去の単独年会にはなかった企画として、我が国の分子生物学研究において偉大な功績を残された先輩方に裏話を含めて研究秘話を語っていただく「Early Bird セミナー」や、ここ数年顕著な業績を挙げている研究者による「Leading Edge セミナー」を盛り込みました。さらに、午前と午後「一般口頭発表」の時間帯を設けることで、学生・若手研究者を中心に 1,000 題以上の一般口頭発表が行われました。これも過去の年会にない試みであり、若い世代に貴重な経験の場を提供できたのではと自負しております。

このように、「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」のテーマのもと企画準備を進めた 34 回年会ではありましたが、開催に至るまでの 3 年の準備期間には、様々な困難がありました。特に昨年 3 月に発生した大震災により、一時は年会の開催すら危ぶまれた時期もありました。実際、東北・北関東地方の多くの会員が被災し、投稿演題数は例年に比べて数百題減りました。また、景気のさらなる落ち込みから、財政的な見通しも非常に厳しくなりました。しかし、被災した研究者の多くが困難な状況ながらも研究を続けておられる姿に、年會を開催することで我が国の生命科学研究をさらに盛り上げ、日本を元気にすることこそが、研究者である私たちの使命であると強く感じました。そして、様々な増収・コストカット策を講じながら、被災学生には参加費免除の措置を設け、ぎりぎりまで Late-breaking Abstracts を受け付ける等の工夫を凝らすことで、なんとか無事例年通りの規模で開催することができた次第です。

本年会には海外からも多くの研究者がご参加くださり、講演会場の内外で活発な交流が行われました。きっと彼らにも、日本と日本の生命科学の力強さをアピールできたのではと思います。また、最終日に行われた市民公開講座には、平日の夜という開催時刻にも関わらず、過去年会で最も多い一般市民の方々にご参加いただきました。特に中高生を含む多くの学生さんが熱心に参加してくださったことを非常に嬉しく思うとともに、日本の生命科学の将来に大きな希望を見ることができました。また年会直前に都内のある高校から学生に年会を見学させてもらえないだろうかという依頼があり、前例のないことだとは思いましたが、了承しました。その結果、生物の先生に引率された十数名の男女高校生が講演会場やポスター会場、さらには展示会場を見学致しました。一般参加者の方々や企業の方たちの親切な対応もあって、彼らはとても大きな刺激を受けたようで、是非、生命科学の道に進みたいという強い気持ちを持った様子でした。会場を去るに当たり、お礼を言いに来てくれた彼らの瞳がきらきらと輝いているのを見て、とても明るい気持ちになりました。震災復興への道のりはまだまだ厳しいですが、34 回年会を開催したことが、この国の明るい未来への一助になりえたとすれば、主催者の一人としてこれ以上の幸せはありません。

たくさん新しい試みを多々盛り込んだ本年会については、色々なご批判もあったかと思えます。ご不便・ご迷惑をおかけした方々にはこの場を借りて深くお詫び申し上げます。にもかかわらず、大きな混乱もなく成功裏に終了できたのは、たくさんの方々のご理解・ご協力の賜です。お力をお貸しくださったプログラム委員長の三浦正幸先生をはじめとする幹事会メンバー、組織委員会各位、オーガナイザー・座長・講演者の先生方、多大なる援助をいただきました企業・助成諸団体、そして活気のある年會に貢献して頂きました参加者の皆さまに、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

大変な年に開催された年會ではありましたが、本年会の開催が分子生物学会のさらなる発展に寄与することを祈っております。

2012 年 1 月

第 34 回日本分子生物学会年会
年会長 花岡 文雄

第34回年会・男女共同参画企画ランチョンワークショップ開催報告

ワークショップタイトル：「全員参加の生命科学研究を目指して」

日時：2011年12月13日(火) 12:15～13:45

会場：パシフィコ横浜第4会場（会議センター3階・303）

企画：日本分子生物学会 男女共同参画委員会

委員長：後藤由季子（東京大学）

副委員長：塩見 春彦（慶應大学）

委員：井関 祥子（東京医科歯科大学）、大杉 美穂（東京大学）、佐藤 健（群馬大学）、篠原 美紀（大阪大学）、
竹内 純（東京大学）、原 英二（がん研究所）、本間美和子（福島県立医科大学）

協力：チエル(株)

第34回年会の初日にランチョンワークショップ「全員参加の生命科学研究を目指して」を開催した。この企画は分子生物学会の男女共同参画企画として、第10回目となるもので、当日は約120名の参加者があった。以下にワークショップの講演要旨、および第3部のクリッカーの集計結果、会場アンケートの結果について以下に報告する。なお、ワークショップで用いた資料およびアンケート結果は分子生物学会 HP に掲載した。（http://www.mbsj.jp/gender_eq/ws2011.html）是非ご覧いただきたい。

I. ワークショップ概要

【第1部】講演「これまでの男女共同参画の取組みと成果」

本間美和子（福島県立医科大学）

今回のテーマである「全員参加の生命科学研究を目指して」、委員会が活動を行うにあたり、過去の委員会活動とその成果を確認し、今後につなげていくことを目的に、講演が行われた。（講演の記録、およびPPT資料は学会HPに掲載）

【第2部】講演「意識改革の必要性について」

塩見 春彦（慶應大学）

2部では、その前の第1部の本間委員の講演でも触れられた「無意識のバイアス」とはどのようなものか、またその解消のためにはどのように取り組み、考えていくとよいかについて、講演が行われた。（講演の記録、およびPPT資料は学会HPに掲載）

【第3部】聴衆参加型ワークショップ

第1部、2部の講演を聞いた後、委員全員が登壇し、会場の参加者とレスポンスシステムを使ってワークショップを開催した。

今回初めて導入した「レスポンスシステム」（協力：チエル(株)）は、参加者に配布した発信機（クリッカー）で、設問への回答結果をすぐに集計し、プロジェクトに結果を表示させるシステムである。本企画の参加者は約120名、クリッカーによるアンケートへの協力者は、98名であった。

会場で行ったクリッカーのアンケート結果は、下記の通りである。

問1. あなたの年齢は？

1. 20代	24%
2. 30代	20%
3. 40代	24%
4. 50代以上	20%
5. わからない	3%
無回答	7%

問2. あなたの性別は？

- | | |
|----------|-----|
| 1. 女性 | 51% |
| 2. 男性 | 37% |
| 3. わからない | 5% |
| 無回答 | 7% |

問3. あなたの立場は？

- | | |
|----------------|-----|
| 1. PI (ラボの主宰者) | 29% |
| 2. PI 以外 | 59% |
| 3. わからない | 2% |
| 無回答 | 10% |

問4. 「日本には男女別の役割分担という美しい文化がある」という発言について、どう思いますか？

- | | |
|------------------|-----|
| 1. (女性回答者) 同感である | 5% |
| 2. (女性回答者) 抵抗がある | 44% |
| 3. (男性回答者) 同感である | 12% |
| 4. (男性回答者) 抵抗がある | 26% |
| 無回答 | 13% |

問5. 6ヶ月前に子供が産まれた同じ研究室の女性ポスドク Mさんが、夕方5時30分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？

- | | |
|----------------------------|-----|
| 1. いいママなんだね | 15% |
| 2. 旦那さんか子供の調子が悪いの？ | 4% |
| 3. 子供が出来たんだからもう少し仕事を頑張らないと | 3% |
| 4. 何とも思わない | 65% |
| 無回答 | 12% |

問6. 6ヶ月前に子供が産まれた同じ研究室の男性ポスドク Kさんが、夕方5時30分に帰宅準備を始めました。どう思いますか？

- | | |
|----------------------------|-----|
| 1. いいパパなんだね | 23% |
| 2. 奥さんか子供の調子が悪いの？ | 14% |
| 3. 子供が出来たんだからもう少し仕事を頑張らないと | 7% |
| 4. 何とも思わない | 41% |
| 無回答 | 14% |

問7. 進路選択の際に、性別を理由にアドバイスを受けた事がありますか？

- | | |
|----------|-----|
| 1. ある | 38% |
| 2. ない | 47% |
| 3. わからない | 7% |
| 無回答 | 8% |

問8. 女性の理系進路選択を促すために有効と考えられる方法は？

- | | |
|-------------------------------------------|-----|
| 1. 研究者が理科の楽しさを伝える | 10% |
| 2. 小中高でもっと自然科学を学ばせる | 12% |
| 3. 研究者の社会的地位向上 (安定した生活) | 32% |
| 4. 高校で文系と理系を分けない | 8% |
| 5. 女性のPI (活躍している女性研究者 /Role Model) の数を増やす | 18% |
| 無回答 | 19% |

問9. 夫婦研究者が同じ研究室に属する場合にどう思いますか？

- | | |
|--------------------|-----|
| 1. 気にならない | 43% |
| 2. 絶対に嫌だ (PIでなくても) | 14% |
| 3. どちらかがPIならば嫌だ | 17% |
| 4. 良い事だと思う | 9% |
| 無回答 | 16% |

問10. 夫婦研究者が同じ研究室に属すると嫌だと思う理由は？

- | | |
|------------------------------------------|-----|
| 1. 監視の目が厳しくなる (ボスの愚痴が言えない等) | 6% |
| 2. フェアでなくなる可能性がある | 36% |
| 3. 夫婦だと互いに依存し合って (いると思われて) 独立の研究者と見なされない | 16% |
| 4. 何となく | 9% |
| 無回答 | 33% |

問11. 夫婦研究者が同じ研究室に属しても良い・気にならないと思う理由は？

- | | |
|-------------------------------|-----|
| 1. 二人の方が生産性が上がる | 7% |
| 2. 家庭生活を維持し易い | 12% |
| 3. 性別でラボメンバーを差別しないことが期待できる | 6% |
| 4. (たまたま夫婦だけで) 一緒に研究して悪い理由がない | 48% |
| 無回答 | 27% |

問12. 最近女性に有利な研究費や、女性のみ申請出来るポジションが増えてきています。これについてどう思われますか？

- | | |
|-------------------|-----|
| 1. 別にいいやん | 9% |
| 2. 不公平である 良くない | 13% |
| 3. 不公平であるが、今は必要 | 46% |
| 4. まだまだ少ない もっと推進を | 17% |
| 無回答 | 14% |

問13. 将来はPIになりたいと思いますか／思っていましたか？

- | | |
|--------------------------------------|-----|
| 1. PIになりたいと思っている (PIになった) | 36% |
| 2. PIに必ずしもなりたくないが、研究を続ける為になる必要があると思う | 27% |
| 3. PIになりたいと思わない | 10% |
| 4. PIになりたかったが、諦めた | 4% |
| 無回答 | 23% |

問14. PIになりたいと思わない (あるいはなりたいたが諦めた) 方に伺います。その一番の理由は何でしょう？

- | | |
|----------------------------------|-----|
| 1. 研究費獲得やメンバー指導に自信がない | 6% |
| 2. 出産などのライフイベントは不利なので、競争できる自信がない | 5% |
| 3. 自分でテーマを生み出し続ける自信がない | 5% |
| 4. 実験が好きなのでずっと実験をしたい | 9% |
| 5. ボスを見て魅力的な立場と思えない | 6% |
| 無回答 | 68% |

問15. 今後も男女共同参画の活動は必要だと思いますか？

- | | |
|------------|-----|
| 1. 必要 | 61% |
| 2. どちらでもよい | 15% |
| 3. 不必要 | 3% |
| 無回答 | 20% |

問16. 男女共同参画の活動はどのような視点で取り組むのが望ましいですか？

1. 女性研究者の研究費・ポジションの優遇、表彰などによるエンカレッジ	14%
2. 女子学生に対する科学教育の充実	7%
3. 学会における女性発表者の増加	6%
4. 研究と家庭生活の両立	38%
5. その他	12%
無回答	22%

II. ワークショップ後のアンケート集計結果

会場参加者には、用紙でのアンケートの協力も依頼した。集計結果、および記入いただいた自由記述欄の概要を下記に掲載する。

(アンケート回収枚数 80 枚)

〈1〉 回答者の属性

・性別

1. 男性	44%
2. 女性	53%
無記入	4%

・年齢

1. 19 歳以下	4%
2. 20-24 歳	18%
3. 25-29 歳	14%
4. 30-34 歳	13%
5. 35-39 歳	9%
6. 40-44 歳	14%
7. 45-49 歳	16%
8. 50-54 歳	6%
9. 55-59 歳	3%
10. 60-64 歳	4%
無記入	1%

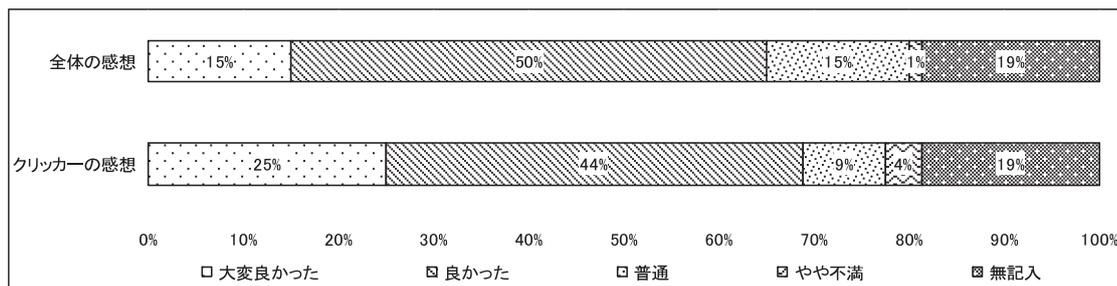
・所属

1. 大学	65%
2. 研究機関	20%
3. 企業	10%
4. その他	3%
無記入	3%

・身分

1. 学部生	11%
2. 修士	9%
3. 博士	6%
4. 研究生	1%
5. ポスドク / 研究員	15%
6. 技術員	6%
7. 助教	13%
8. 講師	1%
9. 准教授	6%
10. 教授	15%
11. 主任研究員 / グループリーダー	1%
12. 役員クラス	1%
13. 部長クラス	1%
14. 主任クラス	3%
15. 一般社員	6%
16. その他	1%
無記入	3%

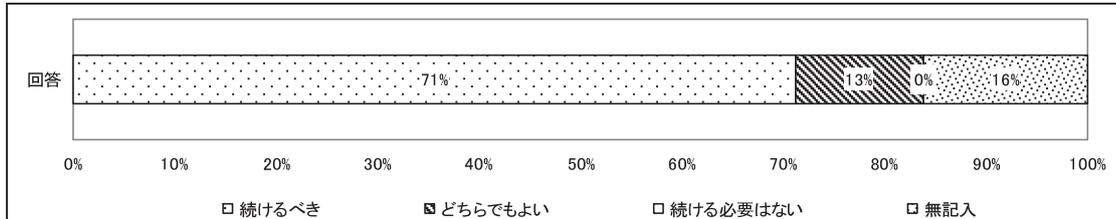
〈2〉 今回のワークショップの感想をお教えてください。



(自由記述の概要)

第1部、2部で取り上げた「無意識のバイアス」に関心をもった意見が多く寄せられた。第3部の聴衆参加型ワークショップについては、他の人の意見がわかって良かった、興味深いという声が複数あった一方、男女別に集計を見たい、途中でボタンが押せなくなった、等のシステム的な問題が指摘された。また、同様のアンケートをワークショップ参加者とは違う母数で行い、その結果を見たいという意見があった。

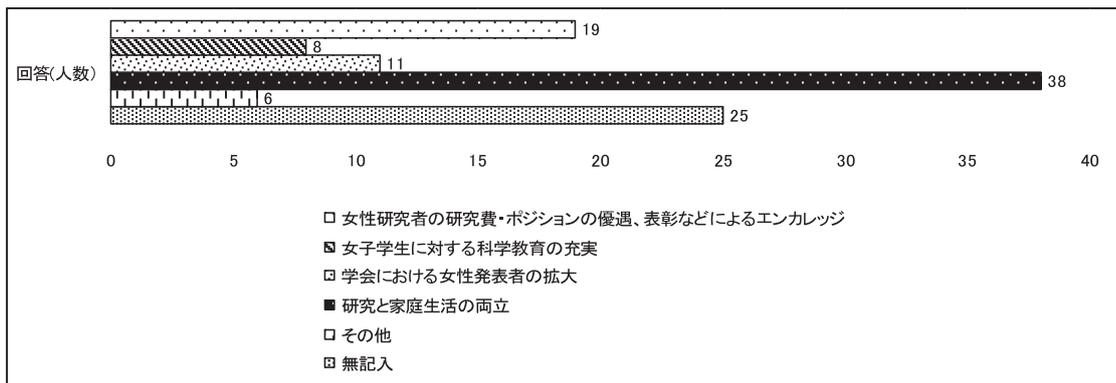
〈3〉 今後も年会において男女共同参画ワークショップを行うべきだと思いますか。今後取り上げて欲しいテーマをお教えください。



(自由記述の概要)

育児、意識改革、ライフプラン、海外の男女共同参画の状況・取組みについて、等をテーマに取り上げて欲しいという意見が多数寄せられた。

〈4〉 男女共同参画の活動はどのような視点で取り組むのが望ましいですか？（複数回答可）具体的なお意見をどうぞお書きください。



(自由記述の概要)

選択肢による回答では、「研究と家庭生活の両立」が最も重視されていたが、自由記述では講演でテーマとなった、意識改革について述べる意見が多かった。また、「研究者の生活の安定」は、「女性」に限定せず、いまの研究生活の改善を進めてほしい等、性別を問わず強く改善を望む声が見られた。

〈5〉 今後、男女共同参画委員会で行って欲しい事業やイベント等があればお教え下さい。

(自由記述の概要)

PIの教育、ロールモデルとなる女性研究者同士の交流等のイベントを希望する声や、今後のテーマとして、男性の育児支援、介護問題、PIになることへの不安を取り除く等の提案が寄せられた。

〈6〉 その他、ご意見がありましたらご自由にお書きください。

(自由記述の概要)

以前に比べ、男女共同参画が進んでいることを実感しつつも、まだ改善が必要な課題があることを指摘する意見が複数見られた。また、女性の優遇を求めるのではなく、性別にかかわらず、能力、業績による評価を求める意見が見られた。

日本分子生物学会年会における発表者の属性統計

～年会における女性のactivity向上を目指して～

”学会のシンポジウムでの発表者やオーガナイザーの女性の比率は
学会員全体における比率と比べて低いのではないだろうか？”

日本分子生物学会男女共同参画委員会はこのような疑問をもち、2009年度から年会発表者の演題カテゴリーごとの属性調査を行っています。今年度は一般演題からの口頭発表希望者割合の集計も行いました。

調査方法

- 1) 日本語でのオンライン演題登録時の記載事項の一部として、性別（男、女、選択なし）、職階、年齢層（5歳きざみ）を選択式の項目として設けた。
- 2) スピーカーを兼ねないオーガナイザーには個別にメールを送り調査した。

演題登録者数

一般演題（日本語）：3233題
ワークショップ（WS）：220題、シンポジウム（日本語）：129題/計349題

回答率

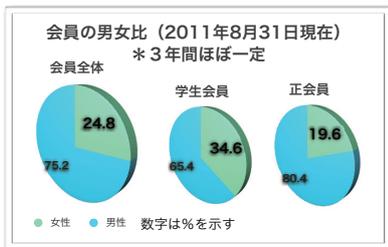
一般演題：95.4%
スピーカー(指定)：94.6%
オーガナイザー：87.8%

MBSJ2011開催概要

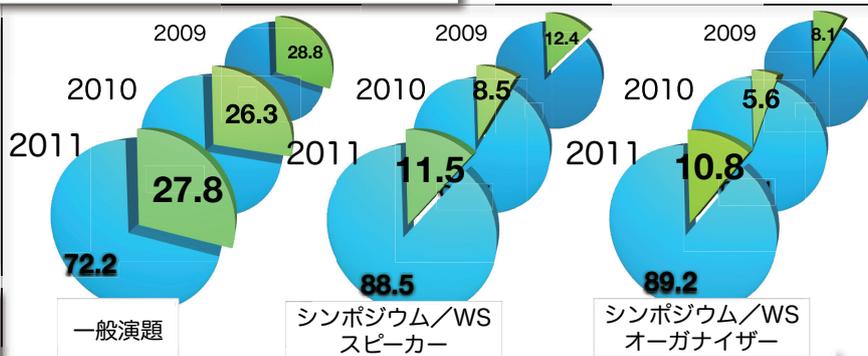
会場：パシフィコ横浜
会期：2011年12月13日-16日
演題登録期間：2011年8月1日-31日



集計結果1 カテゴリー別男女比



●女性 ●男性
*2010年は生化学会との合同大会

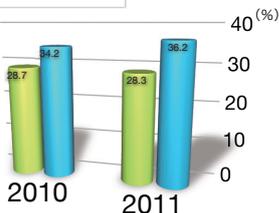


学会員全体と一般演題発表者の男女比は同等である一方、シンポジウム/WSのオーガナイザーやスピーカーは女性の割合が低く、正会員の女性率(19.6%)と比較してもその半分程度であった。しかし、昨年と比較すると女性の割合が増えており、積極登用よびかけの効果が示唆された。

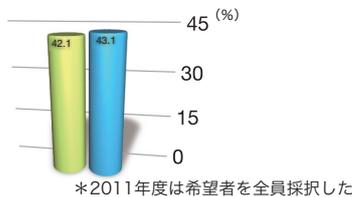
一般演題希望者のうち、口頭発表への採択を希望した割合は男性(約35%)に比べ女性(約28.5%)の方が低かった。希望者からの採択率(要旨内容により選抜)は男女同等であった。

集計結果2 一般演題からの口頭発表希望/採択率

口頭発表希望率

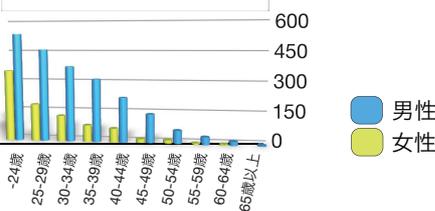


2010年度口頭発表採択率(採択者数/希望者数)

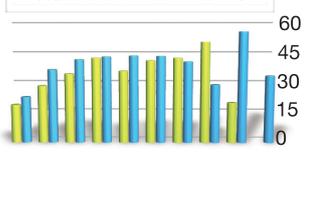


集計結果3 年齢層別一般演題数・口頭発表希望割合

年齢層ごとの一般演題登録人数 (人)



年齢層ごとの口頭発表希望率 (%)



まとめ

◎昨年度までの反省点をふまえ、今年度はスピーカーを兼ねないオーガナイザーに対しても個別にメールを送り属性調査を行った。その結果、回答率はオーガナイザーに対しても85%を超え、より正確な調査が可能となった。

◎どのカテゴリーの男女比も昨年度からの大きな変化はなかった。シンポジウム・WSでの女性スピーカーの割合は約10%と低いが、昨年度よりは割合が増加しており、女性、若手の積極登用呼びかけの効果が示唆された。

◎新たな試みとして、2010、2011年度における一般演題登録者のうち口頭発表採択希望者の割合を算出した。その結果、男性は約35%が希望するのに対し、女性は約28%にとどまっていた。希望者のうちの採択者の割合には男女差はなかった。今後、年会における女性のVisibility向上のためには、女性研究者の積極性の向上が鍵の1つとなるだろう。

研究倫理委員会・若手教育問題ワーキンググループ報告

日本分子生物学会研究倫理委員会の下部組織である本ワーキンググループの活動も今年で5年目となった。これまで年会でのシンポジウム開催や、科学雑誌における座談会や連載等を行い、研究倫理や、誤解を生む余地のない研究や発表を行うための技法についても議論してきた。本年度も、第34回日本分子生物学会年会において若手教育シンポジウム「若手教育ランチョンセミナー2011—研究者として独立するには？—」を開催（平成23年12月14日 主催：特定非営利活動法人 日本分子生物学会、協力：チエル(株)）し、300名収容可能な会場（パシフィコ横浜会議センター3階・301）に約350名の参加者があった。

過去の第1回、第2回シンポジウムでは研究不正の背景に関わる問題、第3回は正しく研究成果を提示するための技術的な問題、第4回はオーサーシップに関する問題、そして第5回にあたる今回は、暗くなりがちな世相に一筋の光明を見出すべく、第一部は京大 iPS 細胞研究所の山中伸弥教授にお願いし、ご自身の研究史についてご講演いただいた。続く第二部は、恒例となったワーキンググループメンバーによるパネルディスカッションとし、これまでの参加者から要望の多かったノートやデータの管理をテーマに、専門家である政策研究大学院大学の隅藏康一准教授に話題提供をお願いした。また、フロアからの意見をリアルタイムにスクリーンに表示できる「レスポンスシステム（レシーバー200台）」を今回も導入し、半数以上の参加者から意見を集めることができた。なお、昨年に続き、企業ランチョンと同様にお弁当の引換券は整理券制度とした。

I. シンポジウムの概要

司会：小林 武彦（遺伝研）、塩見美喜子（慶應大学）
（※全文は分子生物学会のWEBサイトに掲載してありますので、そちらも是非ご覧下さい）

【第一部：講演】

「偶然と幸運から生まれたiPS細胞」

山中 伸弥（京都大学iPS細胞研究所 所長）

基調講演は京大 iPS 細胞研究所の山中所長にお願いした。講演では、ご自身の大学院時代から現在に至るまでの興味と研究テーマの変遷やその一貫性について、専門知識を持たない方にもわかりやすく情熱的にご説明いただいた。

【第二部：パネルディスカッション】

「研究モラルとラボルール」

隅藏 康一（政策研究大学院大学 准教授）

パネリスト：日本分子生物学会・若手教育問題ワーキンググループ

白髭克彦（東京大学）、後藤由季子（東京大学）、小林武彦（遺伝研）、塩見美喜子（慶應大学）、斉藤通紀（京都大学）、上村 匡（京都大学）

参加者約350名に対して200台のレスポンスシステムを配布し、以下の設問について匿名式で答えていただいた。解答時間は30秒で、終了すると前方スクリーンに結果がただちに表示される形式でディスカッションを進めた。（以下のデータは小数点以下四捨五入）

問. あなたの年齢は？

- | | |
|----------|-----|
| 1. 20代 | 67% |
| 2. 30代 | 14% |
| 3. 40代 | 9% |
| 4. 50代以上 | 4% |
| 5. わからない | 6% |

問. 次のような経験がありますか？

- | | |
|-----------------------------------------------|-----|
| 1. 研究室の外で、その研究室の研究全般について、話してはいけないと言われたことがある。 | 4% |
| 2. 研究室の外で、その研究室の特定の研究について、話してはいけないと言われたことがある。 | 41% |
| 3. 上記1と2の両方を言われたことがある。 | 7% |
| 4. そのようなことについて注意されたことはない。 | 48% |

問. ラボノートをつけていますか？（ディスカッション前）

- | | |
|--------------------------------|-----|
| 1. 研究室で義務付けられているからつけている。 | 63% |
| 2. 研究室で義務付けられてはいないが、自主的につけている。 | 27% |
| 3. ラボノートはつけていない。 | 10% |

問. ラボノートをつけていますか？（ディスカッション後）

- | | |
|--------------------------------|-----|
| 1. 研究室で義務付けられているからつけている。 | 46% |
| 2. 研究室で義務付けられてはいないが、自主的につけている。 | 19% |
| 3. ラボノートはつけていない。 | 35% |

問. ポストクとしてD研究所に所属していた□□さんが、E大学に教員として採用されて新たに自分のラボを立ち上げた際の以下の行動について、適切だと考えますか？

- すでに論文に発表したサンプルなので、D研究所に断らずに持ち出した。
 1. 適切である…………… 8%
 2. 適切でない…………… 92%

- 基礎研究に使うだけなので、自分がD研究所に在籍中に発明してD研究所が取得した特許を、E大学における自分の研究のために無断で使用した。
 1. 適切である…………… 15%
 2. 適切でない…………… 85%

問. あなたは、D研究所に所属しているポストクです。近々、新たに独立してE大学で自身のラボを立ち上げることになりました。あなたは、次のどちらの考えに近いですか？

1. 自身の主宰するラボでも、現在までの研究内容に関連する研究を続けたい。…………… 41%
2. 自身の主宰するラボでは、現在までとは別の新たな研究内容に挑戦したい。…………… 59%

II. シンポジウムのアンケート結果

(アンケート回収数：243名)
(回答は四捨五入で計算)

問1 あなたの年齢は？

- ① 24歳以下…………… 122…………… 50.2%
- ② 25～29歳…………… 41…………… 16.9%
- ③ 30～34歳…………… 23…………… 9.5%
- ④ 35～39歳…………… 22…………… 9.1%
- ⑤ 40～49歳…………… 26…………… 10.7%
- ⑥ 50～59歳…………… 7…………… 2.9%
- ⑦ 60歳以上…………… 0…………… 0.0%
- ※ 未記入…………… 2…………… 0.8%
- 計…………… 243…………… 100.0%

問2 あなたの現在の身分・職階は？

- ① 学部学生…………… 64…………… 26.3%
- ② 大学院生(修士)…………… 65…………… 26.7%
- ③ 大学院生(博士)…………… 30…………… 12.3%
- ④ ポストク…………… 15…………… 6.2%
- ⑤ 大学教員(助教・講師・准教授)…………… 35…………… 14.4%
- ⑥ 大学教員(教授)…………… 8…………… 3.3%

- ⑦ 研究員…………… 5…………… 2.1%
- ⑧ 主任研究員・チームリーダー・室長以上…………… 3…………… 1.2%
- ⑨ 企業…………… 14…………… 5.8%
- ⑩ その他(技術員)…………… 1…………… 0.4%
- ⑩ その他(アルバイト)…………… 1…………… 0.4%
- ⑩ その他(記述なし)…………… 1…………… 0.4%
- ※ 未記入…………… 1…………… 0.4%
- 計…………… 243…………… 100.0%

問3 あなたはPI(Principle Investigator:ラボの主宰者)ですか？

- ① はい…………… 22…………… 9.1%
- ② いいえ…………… 205…………… 84.4%
- ③ 場合による…………… 12…………… 4.9%
- ④ わからない…………… 2…………… 0.8%
- ※ 未記入…………… 2…………… 0.8%
- 計…………… 243…………… 100.0%

問4 このシンポジウムを何で知りましたか？(複数回答)

- ① 学会ホームページ…………… 94…………… 36.9%
- ② ポスター…………… 13…………… 5.1%
- ③ 学会会報…………… 89…………… 34.9%
- ④ 会場内の広告…………… 14…………… 5.5%
- ⑤ 他人に聞いた…………… 23…………… 9.0%
- ⑥ リピーター…………… 9…………… 3.5%
- ⑦ その他(プログラム)…………… 7…………… 2.7%
- ⑦ その他(指導教員)…………… 1…………… 0.4%
- ⑦ その他(通り掛り)…………… 1…………… 0.4%
- ⑦ その他(記述なし)…………… 3…………… 1.2%
- ※ 未記入…………… 1…………… 0.4%
- 計…………… 255…………… 100.0%

問5 このシンポジウムに対する全体的なご感想をお教え下さい。

- ① とても面白かった…………… 131…………… 53.9%
- ② まあまあ面白かった…………… 90…………… 37.0%
- ③ 普通…………… 9…………… 3.7%
- ④ あまり面白くなかった…………… 5…………… 2.1%
- ⑤ つまらなかった…………… 0…………… 0.0%
- ※ 未記入…………… 8…………… 3.3%
- 計…………… 243…………… 100.0%

問6 このシンポジウムの内容に関する自由なご感想をお聞かせください。

- ・ It was really really nice.
- ・ 研究者として今後身につけていべきことも教えて頂いたので有意義な時間だった

- ・普段あまり考える機会はないが研究を行ううえで重要なテーマを取り上げたということでも有意義だった
- ・今後もこのような「若手教育」セミナーを行っていったほうが良いと思った
- ・今後の研究生生活において非常に有用なお話を聞かせて頂けて大変良かった、次回また機会があれば是非参加したい
- ・普段は多忙で話を聞くことができない方が講演を下さる機会を提供して下さったことがありがたい
- ・非常に面白かった、特にビッグネームの先生の講演と参加型な点が良かった
- ・初参加です、自分が学生のときにはこのような取り組みはなかったので良いと思う
- ・ラボに入って1年なので考えていないことを教えてもらった、ありがとうございました
- ・今年から研究室に配属された研究生生活のかなり初期のタイミングで研究者としての心構えなどを知れたのはとても良かった
- ・今後研究をしていくにあたり情報管理の姿勢に関して参考になった
- ・研究室に属していない学生部の私にとっては少し難しかった
- ・入社する社員の中にはこのような点について非常に意識が低い人も多い、入社後に教育はするが学生のうちから意識する習慣がついていると良いので今後も議論して欲しいテーマ
- ・初めて参加したが面白かった
- ・聞いて良かった
- ・私は学部2年生だが、シンポジウムに来て英語の大切さを認識した
- ・昼食を食べた直後なのに全く眠くならないほど面白いシンポジウムだった
- ・自分のPIに聞いて欲しかった
- ・サブタイトルと内容が不一致だった
- ・第一部と第二部でテーマが違ってよかった
- ・たいへん勉強になった
- ・来年も来たい
- ・若手のために考えられた内容だった

【第一部：講演について】

- ・山中先生の話が面白かった（同コメント計3件）
- ・山中先生のお話はとても有意義だった
- ・山中先生のお話が大変ためになった
- ・山中先生の話はとてもためになった（何事にもVWを心がけたい）
- ・山中先生の話はとても参考になった、学生や院生にも伝えていきたい
- ・山中先生のお話は大変面白く研究へのモチベーション

- が高まりました
- ・研究するうえでの心構えなどを含め、山中先生の貴重なお話をうかがえて良かった
- ・山中教授のお話が聞けて良かった
- ・山中先生の講演を久しぶりに聴けた
- ・山中先生のお話を直に聞けるといっても貴重な機会が得られてとても良かった、VWを大切にしたいと思う
- ・山中先生という有名で多忙な方を若手のためのセミナーに呼ぶのは私たちにとってとても有り難いこと、こういう方が毎回講演して下さると面白くて参加したくなる
- ・山中先生のように成果を出されている方の昔の話を聞くことができるととてもためになった
- ・研究を中心としたものではなく、有名な先生の考えや経験について話を聞けるのが非常によく参考になった
- ・山中先生の歴史シンボが良かった
- ・山中先生の今に至る経緯を知ることができ有意義だった
- ・オリジナリティのある研究への道がよくわかりました
- ・山中先生への質問時間をもう少しとって欲しかった
- ・山中博士はとても素敵だと思った

【第二部：パネルディスカッションについて】

- ・パネリストの方がたくさん話してくださって、先生の中でも多くの学生側の気持ちも分かってくれる方がいらっしゃるのだと安心した、発言しやすい雰囲気になっていた
- ・パネリストの方々の問いかけが素晴らしく色々考える時間となった、ありがとうございました
- ・パネリストが素晴らしかった
- ・パネリストの先生方がとても良かったと思った
- ・ラボノートのお話が印象に残った
- ・ラボノートについての議論が非常に参考になった
- ・ラボノートなど基本の話も聞けて良かった
- ・ラボノート・捏造問題が生じたときの証拠として最後のよりどころとなる研究者だけでなく企業がバナンスの専門家や弁護士さんをパネリストにしてはどうだったか、問題が生じた大学はとにかく大変、PIもクビになるのがわかっていない
- ・ノートの話など去年と同じであまり面白みがなかった、パネラーの先生方のラボでは実際にどうしているのか聞きたかった
- ・ラボのモラルについてきちんと知る機会がないので良かった（企業では厳しく指導有）
- ・最近学生同士の意見交換をしたときに懸念したテーマだったので非常に興味深かった
- ・パネリストの意見が聞けたのは良かったが結局のところ

ろの答えはなく他で人と話すのと同じだった、そういう意味では専門家による企業でのガイドラインの話は興味深かった、今後日本でガイドラインをどう設定するかという場だったら会場も本気で参加したかもしれない

- ・パネリストの間で意見の違いがありフロアの意見を代表した良い人選であったと思う
- ・パネルディスカッションには時間が足りずパネリストの先生方の意見をあまり聞けなかったことが残念だった
- ・さまざまなPIの方の意見が聞いて良かった
- ・PIの目線での議論が多く若手の意見も聞いてみたい
- ・若手(20代、30代)のパネラーもおいてほしい
- ・学生もパネリストに数名入れたほうが良い
- ・普段気になっていたことが聞けたが議論が若手向けでなかったと思う
- ・普段うやむやになっていたことをはっきり確認できてよかった
- ・問いが一般的すぎていたように思う、ほとんどの解答が偏っていた、これでは議論にならないと思う、もう少しきわどい明らかな答えのない問いを答えてもらったほうが良いと思う
- ・内容が常識的すぎる
- ・合法なのか違法なのかをもっとはっきり名言してほしかった
- ・現実の話と法律論とが混在してのが絞られておらず議論が盛り上がらなかったと思う、研究モラルの意味合い(問題点)についてものが絞られていない
- ・パネリストの意見が同じようだったので、もう少し違った意見を出して欲しいと思った
- ・時間の都合上仕方ないかもしれないが早口で聞き取れない部分が多くあった
- ・私は院生ですが後半のセミナーは「若手」といってももう少し人生を残り研究して生きていくことを決めた方の方がためになる内容であった気がしますが、あまり関心をもてずむしろ研究室をもっている先生方のほうが関心があるのではないかと思った
- ・研究活動は日本だけにとどまらないので海外からのパネリスト・講演者をディスカッションに参加させたほうが討論の幅が広がっておもしろいと思った
- ・時間の割には議論項目が少し多かった
- ・会場も含めた一人ひとりの意見は良いところがたくさんあるのに全体としての流れが少し変な方に流れているような感じがした
- ・前で勝手に進んでいる印象があった
- ・進行の方の総括はディスカッションの内容にはない内容が入っていて(おそらく前から準備しているのだろう)総括にまとまりがなかったと思う

- ・研究には細かいことが必要になるが色々大変なんだと思った、常識と自己判断の境がハッキリしないですね
- ・パネリストの先生方があらかじめ方針・方向を決めたうえでお話されているように聞こえた、電子データの管理方法など議論になっていないと思った
- ・データの扱いなど考えるきっかけになった
- ・小林先生の司会がとても聞きやすかった
- ・上村さんの意見はとても勉強になり今後の役に立ちそう
- ・上村先生の「ラボノートをラボに置いていけと言うわりにはPIはちゃんと生かしているのか?」との指摘は感心した
- ・意見をまとめて欲しい

【聴衆参加型レスポンスシステム】

- ・面白かった(同コメント計3件)
- ・事例を出した後にそれに関してどう思うかをレスポンスシステムで聞いても良かったと思った
- ・リアルタイムで意見を集める講演が面白かった
- ・もっと色々な答えのバリエーションが期待できる設問がおもしろかったと思う
- ・当たり前の結果が出ただけだった
- ・PCで意見を打ち込み前方スクリーンで流れるようにしてはどうか(意見がパネリストの議論の参考になれば)

問7 一昨年から開催時間を夜間からランチョンへ変更しました。どうでしょうか?

① ランチョン形式がよい	220	90.5%
② 夜間(18時以降がよい)	13	5.3%
③ その他の時間(どちらでも)	2	0.8%
③ その他の時間(ランチョンの時間帯以外)	1	0.4%
③ その他の時間(記述なし)	2	0.8%
※ 未記入	5	2.1%
計	243	100.0%

問8 一昨年以降は精神論的ではなく、より具体的な方法論をテーマにしましたが、いかがでしょうか?

① 具体的な方法論が良い	135	55.6%
② もっと本質的な議論の方が良い	40	16.5%
③ 時間が短くとも両方とも必要	49	20.2%
※ 未記入	19	7.8%
計	243	100.0%

問9 『聴衆参加型レスポンスシステム』はいかがだったでしょうか?

① 有効だった	190	78.2%
② あまり意味はない	30	12.3%
③ その他	8	3.3%
※ 未記入	15	6.2%
計	243	100.0%

問10 今まで5年間にわたり、このような活動を続けてきましたが、効果はどうでしょうか？

① 多いに効果がある	72	29.6%
② 多少効果はある	123	50.6%
③ あまり効果は感じられない	14	5.8%
④ 全く効果はない	0	0.0%
※ わからない	4	1.6%
※ 未記入	30	12.3%
計	243	100.0%

問11 今後このような試みを続けるべきだと思いますか？

① 是非続けるべき	199	81.9%
② 続けるべきだが方法を変えた方がよい	26	10.7%
③ 止めた方がよい	0	0.0%
④ わからない	12	4.9%
※ 未記入	6	2.5%
計	243	100.0%

問12 今後取り上げて欲しいテーマがありましたらお教えください。

- ・ グラントの書き方 (同コメント計2件)
- ・ グラントを獲るのに重要なポイント
- ・ 研究費申請の難しさと成功例
- ・ 研究費申請書の書き方、テーマの立て方、考え方、心構えなど
- ・ 大学院生も出せる研究費について
- ・ グラント申請を評価するときの審査員の視点
- ・ ラボ環境から作り上げるときに (任期付きなので転職などで) どうしたらよいか教えて欲しい、日本では任期付きが増え他の専門のところに転職することが多くなった、その他分野で自分の専門を広げていくコツも取り上げて欲しい
- ・ 学生のうちから自分でテーマ・方法を考えるのとPIから与えられたテーマをやるのとどちらがどういう利点をもっているか、実際に今PIになっている人は昔はどうだったのか、現状は
- ・ 学生の motivation (平均) の低下
- ・ 生活と研究とはどのように両立するべきか
- ・ JREC-IN
- ・ 就職問題
- ・ アカデミアのポストが少なく先日も中小企業とのマッ

チングイベントのアンケートがあった、今までも話題になっていたがキャリアパス・キャリアチェンジの考え方や実践について取り上げて欲しい、ポジションへの応募をしながら研究もガンガン進めて子育てもするということが大変苦しいと思っています

- ・ アカデミックでもPIを目指さないキャリアパスについて (技官など)
- ・ 大学院生やポスドクのキャリアパスに関して
- ・ 現在就職難が続いているが研究室によって就職活動への理解、進路選択への理解が異なるように感じる、学生のある意味人生がかかる時期について研究室としてどう向き合っていくべきか
- ・ ポスト、流動性、任期制
- ・ 研究室運営、効率的なマネジメント
- ・ 卒業時におけるデータの受け渡し
- ・ 今回と同じようなテーマを取り上げて欲しい
- ・ PI以外の職とは何か
- ・ 学生の生の声が聞けるテーマが良い
- ・ 営利企業とアカデミアの共同研究におけるデータ管理・研究管理・モラル等
- ・ データの改ざんなど
- ・ 私立と国立の違い
- ・ 学会における参加者モラルの低下とそれを教育する立場への啓蒙
- ・ 研究を盛り上げるには
- ・ 英語で論文を書いたり発表したりするために英語が上達する方法について先生方の今までの経験などをふまえてお聴きしてみたい
- ・ 研究室内でのミーティング方法
- ・ ポスドク、助教等の人材の異動のメリット、デメリットについて、また、人材異動を以下に円滑にするか、ラボが閉鎖的になってしまわないためのシステム構築、現在ポスドクはじめ研究者の中に占める non-PI や任期付きの割合がとても多いが任期付きは人材の異動が活発となり競争的環境を育成するのに良いが時間の必要な研究が腰を落ち着けて出来ないデメリットもありこの辺の兼ね合いやシステムの構築についての議論を聞いてみたい
- ・ 活気ある研究室づくり (実例とともに)
- ・ 世界から見た日本の研究
- ・ 教授との関係性 (正しい距離)
- ・ 他の研究所や研究室に移る際の問題
- ・ 昔と今の研究者・学生
- ・ ラボ内のテーマの近さについて、一つのラボ内でも秘密のことや足の引っ張り合いがあると聞いたりするのですが考えものですよ
- ・ テーマを続ける時、止める時、始める時、終わる時
- ・ ポストの付き合い方

- ・外国人研究者の受け入れ
- ・進路
- ・オーサーシップの問題
- ・ビジョン
- ・研究材料の分与について（論文投稿時にどのような扱いをするかなど）
- ・頭脳還流
- ・近年入社する社員の実験の基礎力が低下しているように感じる、15～20年前に比べると実験は試薬装置とも便利になったがその影響はあるのか、どのような教育法が良いのか
- ・ラボで（イヤホンで）音楽を聴く人について
- ・データの捏造について
- ・地方から発信するということについての方法論
- ・学部学生が研究をするには！？
- ・ES細胞やiPS細胞を用いない再生医療について
- ・増えすぎた情報・データをうまく整理するコツ
- ・研究室内のコミュニケーションについて（PIとメンバー間の関係作り）
- ・ラボ内のディスカッションの方法
- ・有名な先生の経験・考えについての講演を聞きたい
- ・ラボミーティングのやり方
- ・研究テーマの決め方
- ・若手のキャリアパスについて
- ・PIの学生の教育への心構え
- ・研究者間交流の重要性と留学の意識について
- ・研究体験談
- ・科研費の獲得について
- ・ハラスメントについて（アカハラ・セクハラ）
- ・パワハラ
- ・アカハラ対策
- ・もっと具体的な例について先生の実際に行った方法による独立の仕方が知りたい
- ・若手リーダー（理研・上田先生など）の講演
- ・注目されている人物に今後も若手に対して講演してほしい
- ・ラボ内での円滑な人間関係を築くためには
- ・論文のFirst authorに関して

問13 その他、ご意見ご感想などなんでもどうぞ。

【開催形式について】

- ・会場を広くして欲しい（同コメント計6件）
- ・時間は守って欲しい（同コメント計2件）
- ・イスが足りなかった
- ・平日は来れない日が多い
- ・ゲストスピーカーは有名人が良い
- ・整理券を早朝に行かなければ取れないので大変
- ・整理券を持っていたが整列してからの時間が長かった
- ・研究のアイデアだけでなく具体的な戦略や運営などについてこれからも活動して欲しいと思う
- ・同じような内容でも数年ごとにやったら良いと思う
- ・テーブルが欲しかった
- ・今後はtwitterなどを利用しさらにinteractiveにすると面白いのではないかと
- ・twitterを活用したシンポジウムを導入して欲しい
- ・昼に行くなら時間を短くした方がよい
- ・回数を増やして欲しい

【そのほか】

- ・パネリストが東大・京大などにかたよりすぎ、小さな地方大学や私立大学の現状を知っている人も2人くらい入れるべき
- ・始発で横浜に来て整理券をとって良かったです
- ・期間限定で良いので後日web上で公開して欲しい
- ・大変勉強になりました、ありがとうございました
- ・とても面白く参加できた
- ・毎日テーマを限定してはどうでしょう

Ⅲ. おわりに

来年度以降は、小林武彦教授（遺伝研）に座長をバトンタッチし、引き続き、ラボ運営や研究のあり方について後ろ向きにならない議論を展開していただきたいと切に思う。将来はこのシンポジウムが学生さんのみならず、PIにとっても、職業としての科学者のすばらしさを発見、再発見する場にならんことを祈りつつ。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 第17期第2回理事会記録

日 時：2011年12月12日(月)15:00～19:00

場 所：パシフィコ横浜 会議センター

5階「511 + 512」

出席者：小原雄治(17期理事長)、相沢慎一(副理事長)、大隅典子(副理事長)、阿形清和(第35回年会会長兼)、貝淵弘三、影山龍一郎、五條堀孝、後藤由季子、白髭克彦、杉本亜砂子、月田早智子、永田恭介、中山敬一、西田栄介、花岡文雄(第34回年会会長兼)、三浦正幸、町田泰則(監事)、石野史敏(庶務幹事)、上村 匡(編集幹事)、荒木弘之(広報幹事)、篠原 彰(広報幹事)、柳澤 純(集会幹事)、久保田健夫(2012春季シンポジウム世話人)、以上23名

欠席者：審良静男、五十嵐和彦、石川冬木、上田泰己、小安重夫、塩見春彦(会計幹事兼)、田中啓二、谷口維紹、鍋島陽一、水島 昇、宮園浩平、柳田充弘(Genes to Cells 編集長兼)、山本雅之、米田悦啓、勝木元也(監事)、諸橋憲一郎(集会幹事)、山本正幸(富澤基金運営委員長)、以上17名

事務局：福田 博(記録)、並木孝憲、丸田夏子、岩田眞弓

本理事会成立について：

石野史敏庶務幹事より、理事16名、監事1名、幹事5名、議題関係会員1名が出席し、委任状14名(理事13、監事1)を受任しており、本理事会は細則第4章第8条により成立する旨、報告された。

議事録署名人の選任について：

小原雄治理事長より、議事録署名人として、後藤由季子理事と中山敬一理事が指名され、承認された。

議 事：

1. 報告事項

1) 執行部報告(理事長、庶務幹事、広報幹事)

・会員現況

石野庶務幹事より、2011年12月1日現在の会員数につき以下のとおりに報告がなされた。

名誉会員 1名

正 会 員 10,024名(海外在住213含む)

学生会員 5,417名(海外在住80含む)

賛助会員 35社

合 計 15,477名(前年12月対比、+127)

・東日本大震災・復興支援、本学会の対応

小原理事長より、標記についての本学会対応

の概要が報告された。

①学会HPやメール配信を活用した情報の収集と発信

3/16 全会員あてにメール配信(理事長メッセージ)を行い、被災地の研究者を支援するための具体的なアイデアを募った。

3/22 計画停電の影響を受け、NIIサーバが使用できない状況が長期化する可能性を鑑み、学会HPの民間サーバへの移設を完了した。

3/23 会員から寄せられた、被災地の復興支援に関する情報を発信するため、HPに『復興支援ネットワーク掲示板』を立上げ、同時その旨のメール配信を行った。

4/19 『掲示板』のさらなる活用を促すメール配信を行った。

支援情報の掲載項目：

【研究の場を提供・人材の受け入れ】

【実験材料等の一時あずかり】

【機器や試薬の修理・保証・貸出など】

【その他】

5/16 研究室ごとに異なる個別の事情を拾い上げるため、被災地の会員あてに個別にメール配信を行い、情報の収集に努めた。

②東日本大震災で被災された学生会員へ以下の対応を行った。

●被災された学生会員、および新入会の学生を対象に、2011年度の学会費(新入会の場合は入会金を含む)を免除した(実家や保護者が被災された場合も同様に適用)。申請された学生会員は11月末現在で103名であった。

●被災された学生会員を対象に、第34回年会の参加登録費を免除した。申請された学生会員は11月末現在で111名であった。

・「動物愛護管理のあり方について(案)に対する意見の提出」について

本年11月11日、「動物愛護管理のあり方について(案)に対するパブコメについて」に関して、緊急のお知らせといった形で会員一斉メール配信を行ったことが小原理事長より報告

された。しかし問題点がわかりにくいといった会員からの声も多く、さらに、生物科学学会連合より加盟学会あてに各学会会員への周知につき協力してほしいとの依頼を受けたことが報告された。本学会においては多くの会員が動物実験を実施しており、法律の改正内容によっては大きな影響を受けるものと判断し、執行部における検討の結果、学会として環境省パブコメに意見表明する方針を決定し、「動物愛護管理のあり方について（案）に対する意見の提出」案を作成した。

理事会持ち回り審議の結果、11月29日、上記提出文書は承認され、同日、環境省に意見提出を行った。提出意見は学会HPで公開され、11月30日にリマインドメール一斉配信を行ったことが報告された。

2) 第9回日本分子生物学会三菱化学奨励賞選考結果報告

(i) 選考結果報告

相沢慎一賞選考委員（小安重夫賞選考委員長代理）より、標記奨励賞候補として14件の応募があり、委員会による審査・選考の結果（第1次審査はメール持ち回りによる書類審査、第2次審査は東京にて選考委員会を開催）、以下の2名が受賞者として決定したことが報告された。

○永樂元次（理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 副ユニットリーダー）

【研究題目】

（和文）幹細胞の3次元培養系を用いた中枢神経系組織構築の自己組織化の機序
（英文）Self-organizing formation of CNS tissues in three-dimensional culture of stem cells

○山下暁朗（横浜市立大学医学部 講師）

【研究題目】

（和文）動物細胞における mRNA 監視機構の分子機構の研究
（英文）The analysis of gene expression regulation via mRNA surveillance system in mammals

(ii) 日本分子生物学会三菱化学奨励賞・募集要項（規定兼）の一部変更について

相沢選考委員より、小安委員長から申し送られている付帯意見の報告がなされた。* 委員長から申し送られた付帯意見：「今後の課題として、分子生物学会で全く発表をしたことがない方を候補者とするのか、選考委員は推薦資格

があるのか、候補者の独立性をどのように考えるのか、特にこの賞は独立を助ける賞なのか、独立した人に与えられる賞なのか、など公募要領からは読み取りにくいことを一度検討した方が良いのではないか、などの意見が委員会内であった。」

本件について、11月に執行部にて慎重な検討を行っており、小原理事長より以下の執行部提案の説明がなされた。

①年会での発表実績は必要である。

②選考委員にも原則として推薦資格があつて問題はなだらう（過去にも同様の事例あり）。推薦者については投票（得点）をしない、評価意見を述べない、等々の委員会内の申し送り対応で問題はないと考える。

③応募要項の1. 対象の冒頭「…独自にして独創的・革新的な研究を発表し、将来的な発展を期待し得る研究者。…」とあるが、本賞の設立当初からの考え方：独立を助ける・独立したてを助ける・といった捉え方でよいのではないか。

審議の結果、本理事会において上記3点の確認がなされ、さらに次年度より募集要項と推薦書については以下のとおり、一部を変更することが決定された。

●変更点1. 推薦書式の最終頁・最尾に、項目「日本分子生物学会年会での発表実績直近5年程度を目安に記載して下さい。」を追加。

●変更点2. 募集要項1. 対象 に記載のある本学会員歴5年以上の研究者を…。

↓

本学会員歴通算5年以上の研究者を…。（「通算」を追加。）

3) 各種学術賞、研究助成候補への学会推薦状況について

相沢賞推薦委員（小安委員長代理）より、2011年に本学会より推薦した各種学術賞について報告がなされた。引き続き、西田栄介研究助成選考委員長より、2011年の研究助成推薦状況と結果等について報告が行われた。

4) 久保田健夫世話人より、第12回（2012年）春季シンポジウムの開催概要の報告がなされた。

・テーマ：「トランスレーショナル分子生物学～新世代への知の継承～」

・会期：2012年4月25日(水)～26日(木)

・会場：石和温泉 慶山

2012年の春季シンポジウムは、1泊2日の合宿

形式で開催する。若い研究者の範となるような分子生物学のトップランナーに講師を依頼し、さらにポスター討論のディスカッサー役も担ってもらい予定で企画を進めている。プログラム内容は、基調講演2題（東医歯大 石野史敏氏、東大 一條秀憲氏）と招待講演12題を予定している。

4月21日(土)には、コラニー文化ホール（山梨県立県民文化ホール）において、「からだと健康を知る最先端の技術」をテーマに市民公開講座を開催する予定である。

5) 花岡文雄第34回年会長より配付資料に基づき準備状況の報告がなされた。一般演題投稿数は3,462題（うちLate-breaking abstracts投稿は179題）、一般演題申込者のうち口頭発表への採択件数1,100題、事前参加登録は5,119名（うち参加登録費免除となった震災被災学生会員は111名）となり、順調に準備が進んでいる。展示企業の小間数は直近の単独開催年会より若干増え484小間（NBRP、NDBCを含む）となり、バイオテクノロジーセミナー（ランチョンセミナー）は25枠となった。

本年会はキャッチコピー「分子からヒトへーメカニズムを知り、コントロールするー」のもと、「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」をテーマに以下のとおりにプログラムを企画した。

● One Day 集会

各日ごとにテーマをくくった研究集会が複数並行して進行し、それぞれ一定の完結性をもった研究集会のように運営されるといったイメージで行うこととした。

● 一般演題の重視

一般演題の中で、口頭発表を希望するものをプログラム委員が「一般講演」として、1,100題を採択した（一般演題のおよそ3割）。

● 国際性の向上

・シンポジウム、ワークショップの英語化

シンポジウムおよびワークショップともに英語で講演を行うこととした。ただし、質疑応答に関しては、シンポジウムは英語、ワークショップはオーガナイザーに任せることとした。

・要旨の英文執筆推奨

シンポジウムおよびワークショップともに要旨は英語で執筆することとした。また、一般演題においても英語での要旨執筆を推奨し、投稿された演題の英文執筆率は53.4%となった（32回年会は55.5%）。

● 社会性の推進

・男女共同参画企画ランチョンワークショップ
・若手教育シンポジウム

● ITの積極活用

・オンライン講演要旨集

本年会においても、引き続き、講演要旨集はオンライン化し、印刷物やCD-ROMは作成していない。参加登録者はID・パスワードを用いて、オンライン上でプログラムおよび要旨の閲覧・検索・ダウンロードを可能とした。

● プログラム企画

・Leading Edge セミナー

ここ数年、顕著な業績をあげている研究者による特別講演。海外から3名の講演者を招聘。

・Early Bird セミナー

我が国の分子生物学研究において偉大な功績を残された先輩方に、裏話を含め研究秘話を語ってもらう。

・特別企画シンポジウム「HFSPシンポジウム」

HFSPについて理解を深めてもらうように、HFSPを受賞した日本人研究者による講演を行う。

・特別企画展示「ナショナルバイオリソースプロジェクト」(NBRP)

・特別企画展示「使ってみようバイオデータベースつながるデータ、広がる世界」(NBDC) ゲノム、タンパク質、文献などのデータ種類ごとのデータベース、ヒト、植物などの生物種ごとのデータベース、また、それらを構築したり解析したりするためのツールや情報技術について、配布資料やデモを使って紹介する。

・市民公開講座「心とからだの生物学ー明日のために分子生物学にできることー」

大谷直子氏（がん研究所）、竹居光太郎氏（横浜市大）、森郁恵氏（名大）、上田泰己氏（理研CDB）の4名の講師による講演に、JT生命誌研究館の中村桂子館長の司会を織り交ぜて、年会最終日（16日）にメインホール（第1会場）で開催する。

6) 阿形清和第35回年会長より配付資料に基づき、第35回年会開催企画案についての報告がなされた。

・会 期：2012年12月11日(火)～14日(金)

・会 場：福岡国際会議場、福岡サンパレス、マリンメッセ福岡

・年会組織：年会長 阿形清和（京大）、組織委員長 諸橋憲一郎（九大）、プログラム委員長 篠原 彰（阪大）、プログラム副委員長 見学美根子（京大）、財務・

渉外委員長 小安重夫（慶應大）、運営・庶務委員長 巖佐庸（九大）

【開催方式】

本年会は福岡での開催となるが、生化学会大会が同じ時期に福岡で開催されることとなり、生化学会の藤木大会長と協議し、単独&連続開催方式を採用することとなった。

具体的には、2012年12月11日(火)～14日(金)の午前までが分子生物学会年会（市民公開講座は14日の午後メインホールにて開催）、同日午後から16日(日)までが生化学会大会となる予定である。それぞれの学会が特色を出すことに力を入れるとともに、同じ会場での単独・連続開催をすることにより、双方の学会員が学会のあり方について考える機会となり、学会の立ち位置を認識できればと考えている。

なお、連続開催をすることで、企業展示会場の小間の設営や撤去にかかわる人件費や運搬費の削減を図りたいとの報告がなされた。

【年会のコンセプトと運営】

キャッチコピー『～年会の新しいスタイルを模索する～』

第35回年会では、将来の年会モデルを構築することが重要なミッションと考え、単独開催で小回りが利く点を活かし、積極的にIT化を取り入れることで年会において会員間の新たなコミュニケーション方法の創出を図ることを検討している。

シンポジウムを一本化することで普段聞けない話を聞く機会を提供して、ブレインストーミングの場を造りたい。また、ポスター発表者のショートプレゼンテーションのための特別会場を設置し、若手がFace to Faceで議論し、様々な刺激を受けられる年会を目指したい。

そこで、運営については、複数の運営会社によるプレゼン（入札）を行い、上記コンセプトの実現に向け、日本コンベンションサービスを年会運営会社を選定した。収入の半分以上を占める企業展示に関する業務については、生化学会と同じく、エー・イー企画を選定し、両学会が共有する展示会場部分の運営をスムーズに行うとともに、経費の削減を試みたい。

引き続き、資料に基づき、使用予定会場とポスター（案）についても詳細説明が行われた。

7) 上村 匡編集幹事より、配布資料に基づき、学会誌『Genes to Cells』の編集報告が行われた。

生命科学のあらゆる分野、そして理論解析やフィールドワークを含む多様なアプローチなど、

幅広い分野の研究者から論文を投稿してもらえるように、投稿規程を大幅に改訂した。10月には、加藤茂明氏（東大・分生研）、島本 功氏（奈良先端大）、森 和俊氏（京大）の3名に、Associate Editorとして新たに加わってもらった（国内の編集委員は計75名）。

本年1月号より一新した『Genes to Cells』の表紙デザインは購読者からも好評を博しており、2012年も日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙の制作を継続していく予定である（2011年の表紙 / cover art 一覧を資料配布）。

また、出版社からは2010年分の収支報告を受けており、学会誌発行に掛かる収支は安定しているものの、突然の担当者変更などいくつかの問題点もあり、その状況につき説明がなされた。

さらに資料に基づき、Online投稿数一覧（2003-2011）、各年月別投稿数、国別 Accept & Reject率についての報告が行われ、投稿を増やすための方策等につき意見交換された。出席者よりさらなる新しい企画についての質問が出され、編集委員会ではミーティングレポート等の掲載も検討中であることが報告された。理事会関係者においては積極的な投稿をお願いしたい旨、上村編集幹事より依頼がなされた。

8) 後藤由季子男女共同参画委員長より、年会初日の12月13日に開催される、ランチョンワークショップ「全員参加の生命科学研究を目指して」が紹介された（参加者の意見をそのままりアルタイムで表示できるレスポンスシステムを導入）。理事各位においてはぜひ参加してほしいとの要請がなされた。

2009年より実施している調査活動であるが、本年度の第34回年会においても、一般演題発表者、シンポジウム / ワークショップのスピーカー、シンポジウム / ワークショップのオーガナイザーそれぞれの属性調査（男女比、年齢層分布、男女別職階分布）を行ったことが報告され、その属性統計資料が配付された。今年度は一般演題からの口頭発表希望者割合の集計もっており、集計結果資料は会場内の複数の場所で配布し、同時に広報ポスターも掲示される予定である。今後も経年的変化を評価するために本調査を継続していきたいとの説明がなされた。

9) 学術事業企画委員会報告（学会創立30周年記念出版事業）

永田恭介学術事業企画委員長より、本企画3部作の3冊目となる“21世紀の分子生物学”が、本年会に印刷が間に合い、展示会場（書籍コー

ナー)での販売も開始される旨報告された(見本誌・回覧)。年会会期中、3部作については、東京化学同人ブースにてセット特別価格(5,000円)で頒布されることになっている。

● “なぜなぜ生物学” 2010年12月刊行

新書判 縦組 202ページ(定価1,470円 会員価格1,250円)

● “分子生物学に魅せられた人々” 2011年6月刊行

四六判 縦組 232ページ(定価1,680円 会員価格1,400円)

● “21世紀の分子生物学” 2011年12月刊行

A5判 横組 2色刷 288ページ(定価3,360円 会員価格2,850円)

10) 富澤基金・基金運営委員会報告

小原雄治基金運営委員(山本正幸基金運営委員長代理)より、富澤基金による第1回(2011年)日本分子生物学会若手研究助成の結果につき、その概要が報告された。

(i) 広報:

- ・2010年11月発行の会報97号にお知らせ(予告)を掲載。
- ・2011年12月、第33回年会会場にて広報ポスターを掲示。総会にて正式発表。文科省記者会にプレスリリースを行い、同時に主たる全国の研究施設へ案内資料を送付。
- ・2011年12月下旬、第1回募集のお知らせ詳細をHPに公開、同時に全会員へメール配信。

(ii) 第1回応募の受付期間: 2011年1月7日~31日

(iii) 応募総数: 223件

(iv) 選考:

- ・第1次審査: 書類審査
- ・第2次審査: 10名を対象にヒアリングを実施(当初ヒアリングが予定されていた3/18は震災の影響で延期。5/29に審査員全員出席のもとにヒアリングを実施、第1回助成者を決定。)

(v) 助成金支払い:

5/31助成者6名へ決定通知を送付。同時に個々に経理取扱いを確認し、7月上旬までに6名全員への支払いを完了した。6名のうち4名が委任経理扱いであった。1名は全額を個人の一時的所得扱いとされ、残る1名は50万円のみを一時的所得とし250万円を委任経理扱いとされた。

(vi) 記者会見:

7/13虎ノ門にて、記者会見『日本分子生物

学会若手研究助成 富澤基金の発足と、分子生物学会若手研究助成事業報告』を行った。

発表者: 山本基金運営委員長、富澤純一博士、小原理事長(司会進行/兼)

プレス参加: 約10社

(VII) 審査経過と第1回助成対象者:

審査経過については、会報99号(2011年7月号)に結果報告を掲載済みであるので参照されたい。第1回若手研究助成の助成対象者は以下のとおりである。

○植木 紀子 Bielefeld University, Germany
(博士研究員)

研究題目「緑藻ボルボックス目の多細胞化に伴う走光性の進化: 改良トランスポゾンタギング法による機能欠損変異体作製と遺伝子機能解析」

○大澤志津江 神戸大学大学院医学研究科 細胞生物学 G-COE (G-COE 研究員)

研究題目「細胞競合の分子機構の遺伝学的解析」

○久原 篤 甲南大学理工学部生物学科(講師)

研究題目「線虫 C. エレガンスをもちいた環境情報の識別と適応の分子機構の解析」

○佐野 浩子 お茶の水女子大学 お茶大アカデミック・プロダクション(特任助教)

研究題目「ショウジョウバエの fat body を用いた脂質代謝制御および内分泌機能の解析」

○茶谷 絵理 神戸大学大学院理学研究科化学専攻(准教授)

研究題目「アミロイドーシスの伝播を担うアミロイド自己複製反応機構の解明と制御」

○丹羽 隆介 筑波大学大学院生命環境科学研究科(助教)

研究題目「セロトニン産生神経依存的なステロイドホルモン生合成制御と発育プログラムの適応的調節」

11) 白髭克彦若手教育問題ワーキンググループ座長より、年会2日目の12月14日、ランチョンセミナー形式で、若手教育ランチョンセミナー2011「研究者として独立するには?」が開催されることが報告された。第一部では「偶然と幸運から生まれたiPS細胞」と題して、山中伸弥氏(京大)による講演を行う。第二部は「研究モラルとラボルール」をテーマに、隅藏康一氏(政策研究大学院大学)を招き、WG委員がパネリストとなり、参加者の意見をそのままリアルタイムで表示でき

るレスポンスシステム(クリッカー 200 台を用意)を使用し、相互討論ができる企画となっていることが報告された。

12) その他

- ・ 通常総会 / 議事進行と報告担当者の確認
- ・ 第 1 回富澤基金贈呈式について

小原理事長より、今年は“開かれた”総会を目指し、ポスター展示会場・休憩コーナー内に特設会場を設置して総会を開催することが報告された。総会終了後には第 1 回富澤基金贈呈式が行われる予定である。理事会関係者においても多数参加してほしいとの要請がなされた。

引き続き、石野庶務幹事より、第 34 回通常総会資料についての説明がなされ、総会当日の議事進行ならびに報告担当者の確認が行われた。

2. 審議事項

1) 2011 年度(平成 23 年度)収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事欠席のため、会計幹事代理として事務局(福田博)より 2011 年度(平成 23 年度)会計の収支について説明がなされた。黒字決算となったポイントは、①年会会計(BMB2010 決算の分子生物学会扱い分の収支繰入)と② Genes to Cells の出版社からの総利益折半の精算収入、の 2 点である。各科目についての説明がなされた後、「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金会計」についての決算報告がなされた。一般会計における会計上のマイナス要因として、会費収入の落ち込みがあるが、これは被災された学生会員からの被災申請に対して 2011 年度入会金と会費を免除したことが要因の 1 つであり、さらに全体的な会費納入率もやや下がってはいるが、会員数そのものは若干増えているので、来年度は復調する見通しである。

本決算においては、消費税約 127 万円を納め、その他の税務処理については、顧問契約を交わしている税務専門家の指示のもと、収益事業部分の法人確定申告を行った。本決算は、11 月 4 日に宮城秀敏公認会計士の監査を受け、配付資料のとおり監査報告書が提示されている。

財務諸表一式の説明がなされた後に、町田泰則監事より、11 月 15 日、勝木元也監事とともに学会事務局にて会計監査を実施し、金融機関の残高証明書等を一式確認し、23 年度決算を認めたことの報告がなされた。

審議の結果、本決算は理事会で承認され、第 34 回通常総会に諮られることとなった。

2) 国際会議支援について

先ず初めに、小原理事長より、2010 年 12 月に第 16 期理事会から申し送られた将来計画検討委員会提言についての説明がなされた。第 16 期将来計画検討委員会より、国際対応の一環として、今後、あらたな国際シンポジウム企画(国際会議開催の支援を含む)を立ち上げていくことが提案されており、その具体的な内容は次のようなものであった。

- ・ シンポジウムセッションとしては 3 件程度(予算の目安は 300 万円×3 テーマ)、うち 1~2 つは年会開催時に独立したサテライト扱いの位置付けとする。
- ・ 年会サテライトの場合は、年会前日の 2 日程度を想定しており、可能な限り、年会で確保している会場を融通させてもらう。
- ・ 現行の春季シンポジウムは発展的休止扱いとし、あらたな国際会議開催(国際会議支援)は、理事会からの世話人指名ではなく公募形式に変えていく。

(*「第 16 期 将来計画検討委員会 提言」の詳細については、学会 HP → 理事会報告ページ <http://www.mbsj.jp/admins/index.html>を参照。)

以上の第 16 期将来計画検討委員会提言を受けて、執行部では、この秋、メール持ち回りによる検討を重ね、11 月 15 日に学会事務局にて執行部会議を開き、【国際会議支援について】(案)を作成したことが報告された。

引き続き、執行部メンバーである篠原彰広報幹事より配付資料 4 点(①国際会議支援について(執行部提案)、②国際会議支援(開催補助金)申請書、③ JTB 西日本 / 国際会議トータル支援システム提案資料(利用料金とシステム AMARYS の概要)、④契約書案の詳細説明)がなされた。支援システムを依頼する会社については、事務局が候補 4 社の資料と見積りを集めた結果、執行部では、もっともリーズナブルかつサポートメニューが豊富であった JTB 西日本を第一候補会社を選定した。執行部案の概要は以下のとおりである。

【国際会議支援について】(案)

科学のグローバル化が進む一方で、国際会議を通しての情報の交換は科学の大きな必須手段の 1 つとなっている。しかし、日本で開催される、質の高い国際会議の数は増えていない状況がある。また、関連分野の最新の研究に若い時から接することは優秀な研究者を育てる上で要の 1 つと考えられる。本支援は、日本(あるいはアジア)発の originality の高い国際会議を育て、サポートする

こと、日本発の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的とする。

■募集要件

1. テーマ：分子生物学の分野ならどのような分野でも可—新しい領域、外国では見受けられないユニークなテーマが望ましい。
2. 開催規模：参加人数は50名以上200名程度までとし、そのうち外国からの参加者が20～30%いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式：
 - 1) 分子生物学会会員が主催者あるいは共同主催者であること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除く。
 - 2) 共催：他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格（特に学生会員を考慮されたい）が設定されていることが望ましい。
4. 留意事項：
 - 1) できる限り、国内の若手研究者の口頭発表の機会を作ることが望ましい。
 - 2) 本学会年会のサテライト会議とすることが望まれるが、他の時期・場所での開催も可能とする。
 - 3) 会議開催に際しては、分子生物学会が用意している支援システム（JTB 西日本による国際会議トータル支援システムを長期契約のもとに割安価格で使用）、①基本システム代金：23万円（事前参加登録受付・演題投稿受付・カード決済等の基本システム設定）、②オプション/メインHP代金：25万円（全体デザイン・ページレイアウト・サーバ管理12ヶ月・更新メンテナンス12ヶ月）、③オプション/オンライン査読システム：8万円、④オプションその他、のうち 基本システム①を必ず使用することを応募条件とする。
 - 4) 支援が決定した後は、主催者は各種の報告書・広報ポスター・国際会議HP等に本学会からの支援を受けて開催されることを、表示する義務を負うものとする。
 - 5) 残金が出た場合、補助金の返還を求めることがある。

■開催補助金と件数

援助する金額は、一件あたり200万円～300万円。年間2～3件（うち1～2件は年会サテライト扱いでの開催申請を想定）。開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国

際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

（補助金の使用用途は限定せず自由度を持つものとする。他経費で補えないものが望ましい。ただし国際会議終了後、本学会への会計報告（収支決算書概要）提出の義務を有する。また、分子生物学会の支援を受けたことをHP、要旨集などに明記する。）

■応募方法

所定の申請書に、国際会議の目的、形態、予定講演者、おおよその予算規模と使用用途等を記載し、学会へ提出する。

■スケジュール

原則として2年前に公募を行う。

*同支援制度導入の初年度は、2013年（2013年1～12月開催）計画の応募を下記スケジュールにて受け付ける。

○2012年2月下旬：会報2月号と学会HPにて広報

○2012年3月末：応募締切

○2012年4月：選考【2013年の支援は導入初年度であるため開催約1年前に交付】

○2012年5月下旬：補助金の交付…2012年の学会予算より支出

*2014年（1～12月）計画の応募については下記スケジュールを予定とする。

○2012年6月下旬：会報6月号と学会HPにて広報

○2012年8月末：応募締切

○2012年9～10月：選考【2014年の支援より、開催の1年半前には採択決定】

○2012年11月：補助金の交付・・・2013年の学会予算より支出

■選考

国際会議支援・選考委員会（仮称）において選考し、理事長承認のもとに決定する。

（案：理事会内に新規に国際会議支援・選考委員会を立ち上げる）

■その他

国際会議トータル支援システム（JTB 西日本）について、本支援事業とは別に、システムのみを使用したいとの要望があった場合、分子生物学会員であれば同額での利用が可能である。ただしその場合は、直接JTBに申し込むのではなく、一旦、学会を經由（学会事務局が中継手続き）して、申込みをしてもらうこととなる。また、分子生物学会の支援（システム利用）を受けたことをHP、

要旨集などに明記してもらう。

篠原広報幹事による説明の後、討議に入り、活発な意見交換がなされた。本事業のポリシーをもっとはっきりさせたほうが良いのではないかと、ぜひ若い人に応募（挑戦）してもらいたい、求めているものが多すぎるように思うが基本コンセプトはどこにあるのか、あらたな支援事業にしなくとも毎年の年会プログラムの中にこのような公募形式の国際会議を自動的に組みこむことはできないのか、日本発のプレステージの高い国際会議を育てていくことは非常に大事である、若い人の背中を押してあげるのはとても良いだろう、まずはこの新しい試みにトライしてみてもどうか、関連して将来的に学会事務局にもグローバル対応できる人員増員の強化をはかるべきだ、等々、多くの意見が出された。

審議の結果、若い人へのチャンスを増やすことは本学会の使命であろうとの認識で一致し、本国際会議支援事業を実行に移していくことが決定された。今後の具体的な手続き・スケジュールについても承認された。選考実務については提案通り、あらたに「国際会議支援・選考委員会」を立ち上げることとし、その人選については小原理事長に一任された。

3) 2012年度(平成24年度)収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事の代理として事務局より2012年度(平成24年度)の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。国際会議支援事業(上記、審議事項2)が承認され、その補助金が2012年度予算案に反映されたため、2012年度会計においては、国際会議補助金と2012年春季シンポジウム開催経費の支出が単年度会計内で重複することとなり、2012年度会計においては661万円の赤字予算を編成することとなるが、次年度以降の収支は改善される見通しである。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は理事会で承認され、第34回通常総会に諮られることとなった。

4) 定款変更の件

3.11地震の影響を受け、学会事務局が入居していたビルにかなりの実害(各階に廊下を横断する多くのクラックが入った)があったことが、小原理事長より報告された。4月8日、小原理事長、石野庶務幹事による旧ビルの実地見分の後、早急に移転先が検討され、比較的近い場所にあり耐震基準を満たしているビルへの引越しを決定し、学

会事務局は4月28日に移転した。

手続き上、事後承認の形となったが、下記のとおり、定款第2条事務局所在地変更が諮られ、承認された。

特定非営利活動法人日本分子生物学会 定款(抜粋)

第1章 総則

(事務局)

第2条

(旧) この法人は、主たる事務局を東京都千代田区飯田橋3丁目11番5号20山京ビル1105号室に置く。

↓

(変更) この法人は、主たる事務局を東京都千代田区飯田橋2丁目11番5号人材開発ビル4階に置く。

5) 第36回(2013年)年会長について

小原理事長より、第36回年会については、年会長を大阪大学大学院生命機能研究科 近藤 滋員に依頼したいことが諮られ、承認された。(開催地:神戸、会期:2013年12月3日(火)~6日(金)/会場については事務局にて3年前に確保済み)

6) 社会との関わり・社会貢献活動について(執行部提案)

一昨年度からの高校の新学習指導要領実施に関連して一“社会との関わり”については、前期第16期将来計画検討委員会でも議論を重ねてきた案件であるが、来年度からの高校新学習指導要領実施に関連して、本執行部において検討作業を復活したことが小原理事長より報告された。

引き続き、篠原広報幹事より配付資料に基づき、以下のとおりに詳細説明がなされた。

〈社会との関係について〉

本学会の社会貢献の1つとして高校(や中学)との関係が考えられる。最先端の分子生物学の情報を、将来を担う高校生に普及することは科学者の役割として重要なことと考えられる。来年度から高校の生物の教科書が大幅に改定され、分子生物学が中心となるようである。一方、高校の教師は新しく導入された分子生物学の領域についての知識などが不足していて、教えることに対する不安を抱く教師もいる。

一方で、学会や研究者と高校の関係は各研究機関の繋がり、個人的な繋がりによっていて、強いとは言えず、また、恩恵を受ける場合とそうでない場合の格差が大きいのが実情である。

分子生物学会が主体となって、研究者と高校の関係を図るネットワーク、リソースを構築してい

くことが重要となろう。

●具体的な方法案

1. 分子生物学会の全会員に呼びかけ、高校などに出前講義や高校の教師向けの講義を行ってもよい研究者を募り、データベースを地域毎に作成する。
2. 本学会の全会員に呼びかけ、SSH などの高校の教師などの知り合いを紹介してもらうなどをして、高校とのネットワークを作成する。
3. 学会 HP やメールなどを使い、高校などに広く、講義などの希望を募る。希望に応じて適当な講師を上記のデータベースから紹介する。適任者がいない場合は、他地域からの紹介も行う。
4. 基本的に学会はマッチングを行う。出張に関わる経費は当事者（研究者あるいは、高校側）の負担とする。双方に経費が無い場合は、条件によっては学会がサポートする。

.....
引き続き、石野庶務幹事より改定版教科書（改定案／冊子）の中身について補足説明がなされた。

これに関連して、年會に積極的に高校生（教員と生徒）を招待したらどうかとの意見が提出された。（*明日からの年會において、引率の教師＋高校生、計約 20 名の参加（学会見学）が予定されていることが花岡年會長より報告された。高校生招待については第 35 回年會でもぜひ対応していきたい旨、阿形 35 回年會長からも意見が提出された）

討議の結果、執行部案は了承され、本事業については、石野庶務幹事と篠原広報幹事が中心となり具体的作業を進めていくこととなった。

7) 日本語オンラインジャーナル企画・DBCLS 提案への対応

篠原広報幹事より、配付資料に基づき、学会発日本語オンラインジャーナル企画案（2011 年 10 月再改訂版）について、経緯と資料説明が行われた。前期の理事会においても、幾度か、PNE に代わるオンラインジャーナル（日本語の総合レビュー誌）について議論されてきたが、関連分野の他学会同様、本学会もその対応については慎重に様子を見てきた経緯がある。

今年度に入って、先方より再度の検討依頼の連絡を受け、10 月 6 日、学会事務所において、DBCLS・飯田啓介氏、石野庶務幹事、篠原広報幹事（事務局の福田・並木も同席）にて打合せの場を持った。

話し合いの結果、学会執行部としては、

1. 学生や若い人向けの日本語のレビュージャーナルの発行というコンセプトには賛成

できる。

2. 学会の連合体制による編集委員会では、さまざまな利害関係を生みやすいので、学会単位での参画ではなく、オンラインジャーナルの編集委員会が正式に立ち上がる（協力学会が編集委員を推薦し、編集委員会を立ち上げてもらう）方法が妥当であろう。
3. 学会としてはジャーナルに対して中立性を堅持することが最も重要である。

以上の参考意見を提出した。その結果、再改訂版として飯田氏より提出されてきたものが、本日の配布資料である。篠原広報幹事による報告の後、元 PNE 編集委員であった貝淵弘三理事からも補足説明がなされ、さらに小原理事長より DBCLS での本事業の状況についても説明が行なわれた。

討議の結果、本学会の対応としては、立上げ時の編集委員の推薦（1～2 名）といったことのみであるので、基本的に本事業に協力していくことが確認され、その旨、を DBCLS・飯田氏へ回答することとなった。

8) 科学政策懇談会からの報告、提言、今後の活動について

中山敬一理事より、今期、科学政策懇談会を開催するに至った経緯につき、説明がなされた。ことの発端は、本年 1 月の学術会議会員候補者／推薦依頼に関するメール持ち回り審議であったが、1～2 月の理事会メンバー・メール討論を経て、その後、3 月 7 日と 5 月 31 日の 2 度に亘り、東京において、科学政策懇談会を行なった。同懇談会の構成メンバーは以下のとおりであった。

【分子生物学会・科学政策懇談会】

- ・コアメンバー：中山敬一世話人、篠原彰広報幹事、阿形清和理事、貝淵弘三理事、小安重夫理事、水島昇理事
- ・シニアメンバー：小原雄治理事長、田中啓二理事、谷口維紹理事、柳田充弘理事

懇談会での議論は中山世話人によって、提言の形で以下のように取りまとめられ、同提言資料に基づき、詳細説明がなされた（提言は懇談会メンバーの確認作業を経ている）。

《分子生物学会・科学政策懇談会 提言》

「科学者がどのように科学政策に関与していくべきか？分子生物学会としてのあり方について」（平成 23 年 12 月 12 日）

提言資料の構成は、○緒言、○基本スタンス、○提言より成っており、提言部分の概要は次のとおりである。

理事長はオブザーバーとして参画することとなった)

○提言

- (1) 分子生物学会・理事会の下に、「科学政策委員会」を設置し、その下に「研究環境・次世代教育ワーキンググループ」と「科学政策提言戦略ワーキンググループ」の二つを設置する。
- (2) 「科学政策委員会」は非常設とし、二つのワーキンググループの調整や大きな立場からの問題解決が必要となった場合に、適宜会合を開いて議論する。(※1)
- (3) 「研究環境・次世代教育ワーキンググループ」では研究・教育に関わる多くの問題について討議する。叩き台としての提言を作成すると共に、それを具現化する方法論を考える。(※2)
- (4) 「科学政策提言戦略ワーキンググループ」では、現在の科学者サイドからの科学政策提言を行う枠組みの問題点を洗い出し、その解決法について討議する。叩き台としての提言を作成すると共に、それを具現化する方法論を考える。(※3)

(5) 一年間で集中的に討議し、次回の年会においてフォーラムを行い、広く会員に周知するような中間報告を行う。

※1 「科学政策委員会」のメンバーは、現在の懇談会メンバーをそのまま委嘱する。

※2 メンバーは篠原理事(教育担当議長)・水島理事(研究担当議長)・貝淵理事・中山理事+数名(基本的には理事から選出)。

※3 メンバーは阿形理事・小安理事・中山理事+数名(基本的には理事から選出)。(小原

中山理事による説明の後、討議に入り、活発な意見交換がなされた。研究環境・次世代教育WGはいわばアイデア(具体的な提言)を作るといった位置付けであり、科学政策提言戦略WGはどのアイデアを通していくか、どういった経路で上へ(国の組織へ)へ上げていくか(戦略)といった位置付けである。関連して、石野庶務幹事より、第32回年会開催時(2009年12月)に行われた緊急フォーラム「事業仕分けから日本の未来の科学を考える」で経験した、科学者側からの意見表明の重要性についての説明がなされた。

審議の結果、本理事会としては同提言を承認し、懇談会メンバーを科学政策委員会とし、二つのワーキンググループ活動をサポートしていくことを決定した。WGメンバーに追加すべき理事若干名の人選については、中山世話人と小原理事長に一任された。

上記、第17期第2回理事会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

2011年12月12日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第17期第2回理事会
議長 小原雄治 ㊟
議事録署名人 後藤由季子 ㊟
議事録署名人 中山敬一 ㊟

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 平成24年度(第34回)通常総会記録

日時:平成23年12月16日(金)12:50~13:20

場所:ポスター・展示会場 休憩コーナー内特設会場
(パシフィコ横浜 展示ホール)

社員数(正会員+名誉会員):10,024名

出席者数:5,421名(本人出席42名、表決委任者5,379名)

議事内容:

1. 小原雄治理事長より開会の挨拶がなされた。
2. 定款第25条に基づき、小原理事長より本総会議長として升方久夫会員が指名された。さらに定款第29条に基づき、議事録署名は、花岡文雄会員(第34回年会長兼)と小原理事長が担当することが確認された。
3. 升方議長より、定款第26条(総会の定足数)に基づき、上記表決委任者(委任状)を含めて出席5,421名となり、

本総会は成立する旨報告された。

4. 経過報告(事業報告)

1) 理事長報告

小原理事長より、総会資料(1頁:2011年度事業報告)に基づき、事業活動全般につき報告が行われた。

年会前日の12月12日に第17期定例理事会が開催され、同会議にて決定された下記事項4点につき、説明がなされた。

①国際会議支援について

理事会で審議した結果、2013年に開催計画のある国際会議より、本学会が毎年2~3件の支援を行っていくことが決定された。支援の概要は以下のとおりであり、詳細は会報2012年2月号と

学会HPにてお知らせする予定である。関連分野の最新の研究に若い時から接することは優秀な研究者を育てる上で要の1つと考えられ、本支援は、日本（あるいはアジア）発の originality の高い国際会議を育て、若手研究者をサポートすること、日本発の研究を世界に向けて発信する場を設けることを目的としている旨の説明がなされた。

■募集要件（概要）

1. テーマ：分子生物学の分野ならどのような分野でも可—新しい領域、外国では見受けられないユニークなテーマが望ましい。
2. 開催規模：参加人数は50名以上200名程度までとし、そのうち外国からの参加者が20～30%いること、さらに口頭発表者の中で外国人が3割以上を占めることが望ましい。
3. 開催の形式：
 - 1) 分子生物学会会員が主催者あるいは共同主催者であること。教育・研究機関の主催、研究費主催のものは除く。
 - 2) 共催：他の団体との共催は可とするが、その場合、参加費に関して分子生物学会会員価格（特に学生会員を考慮されたい）が設定されていることが望ましい。

■開催補助金と件数（概要）

援助する金額は、一件あたり200万円～300万円。年間2～3件（うち1～2件は年会サテライト扱いでの開催申請を想定）。開催期間・参加予定人数によって金額の変動あり。学術振興会の国際会議等の大型支援を助成された場合は多少の減額あり。

■スケジュール（概要）

原則として2年前に公募を行う。

*初年度は、2013年（2013年1～12月開催）計画の応募を下記スケジュールにて受け付ける予定である。

- 2012年2月下旬：会報2月号と学会HPにて広報
- 2012年3月末：応募締切
- 2012年4月：選考
- 2012年5月下旬：補助金の交付（2013年の支援は導入初年度であるため開催約1年前の交付となる）

■選考

理事会内に国際会議支援・選考委員会を立上げ、選考を担当する。

②科学政策について

科学者がどのように科学政策に関与していくべきか、学会としての対応（あり方）をどのようにしていくか、等々についてを、理事会で検討した結果、理事会内に科学政策委員会を設置し（委員会の下部組織として2つのワーキンググループを立ち上げる予定）、具体的な検討作業を進めていくことが決定された。

③社会との関係

本学会の社会貢献の1つとして高校（や中学）との関係が考えられる。最先端の分子生物学の情報を、将来を担う高校生に普及することは科学者の役割として重要なことと考えられる。来年度から高校の生物の教科書が大幅に改定され、分子生物学が中心となるようである。一方、高校の教師は新しく導入された分子生物学の領域についての知識などが不足していて、教えることに対する不安を抱く教師もいるとの声を聞いている。

理事会で検討した結果、このような問題に対して、本学会が主体となって、研究者と高校の関係を図るネットワーク、リソースを構築していくことが重要であることが確認された。2012年はこの問題について、具体的な対応を進めていく予定である。

■具体的な方法案

- 学会員に呼びかけ、高校などに出前講義や高校の教師向けの講義を行ってもよい研究者を募り、データベースを地域毎に作成する。
- 全会員に呼びかけ、SSHなどの高校の教師などの知り合いを紹介してもらうなどをして、高校とのネットワークを作成する。
- 学会HPやメールなどを使い、高校などに広く、講義などの希望を募る。
- 基本的に学会はマッチングを行うことを想定している。

④第36回（2013年）年会長について

12月12日に開催された理事会において、第36回年会については、近藤 滋 会員（大阪大学）に年会長をお願いすることが決定した。

2) 庶務報告

石野史敏庶務幹事より会員現況についての報告が行われた。

会員現況：〔2011年12月1日現在〕名誉会員1名、正会員10,024名、学生会員5,147名、賛助会員35団体、総計15,477名（前年12月対比、+127）

3) 第12回（2012年）春季シンポジウムについて

石野庶務幹事（久保田健夫世話人代理）より、標記シンポジウムの開催概要の報告がなされた。

・テーマ：「トランスレーショナル分子生物学～新世代への知の継承～」

・会期：2012年4月25日(水)～26日(木)

・会場：石和温泉 慶山

2012年の春季シンポジウムは、1泊2日の合宿形式で開催する。若い研究者の範となるような分子生物学のトップランナーに講師を依頼し、さらにポスター討論のディスカッサー役も担ってもらう予定で企画を進めている。プログラム内容は、基調講演2題と招待講演12題が予定されている。

4月21日(土)には、コラニー文化ホール(山梨県立県民文化ホール)において、「からだと健康を知る最先端の技術」をテーマに市民公開講座が開催される予定である。

4) 編集『Genes to Cells』報告

上村 匡編集幹事より『Genes to Cells』の刊行状況につき報告がなされた。

生命科学のあらゆる分野、そして理論解析やフィールドワークを含む多様なアプローチなど、幅広い分野の研究者から論文を投稿してもらえるように、投稿規程を大幅に改訂した。10月には、加藤茂明氏(東大・分生研)、島本 功氏(奈良先端大)、森 和俊氏(京大)の3名に、Associate Editorとして新たに加わってもらったことが報告された(国内の編集委員は計75名)。

本年1月号より一新した『Genes to Cells』の表紙デザインは購読者からも好評を博しており、2012年も日本の伝統絵画の中に生命科学の遊び心を加えた表紙の制作を継続していく予定である。会員各位においては引き続き、積極的な投稿をお願いしたい。

5. 議 事

1) 平成23年度(2011年度)収支決算承認の件

塩見春彦会計幹事より23年度決算の収支内容につき詳細報告が行われた。本決算の監査については、以下のように報告された。

2011年11月4日、公認会計士 宮城秀敏氏の会計監査を受け(総会資料：独立監査人の監査報告書を参照)、同年11月15日に、勝木元也監事、町田泰則監事の監査を受けた。

審議の結果、本決算は異議なく承認された。

2) 平成24年度(2012年度)収支予算ならびに事業計画承認の件

塩見会計幹事より24年度の収支予算案、事業計画につき説明が行われた。

審議の結果、同収支予算ならびに事業計画は異議なく承認された。

3) 定款変更の件

3.11地震の影響を受け、学会事務局が入居してい

たビルにかなりの実害があり、学会事務局は4月28日に移転したことが、小原理事長より報告された。

手続き上、事後承認の形となったが、定款第2条事務局所在地変更が諮られ、承認された。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 定款(抜粋)

第1章 総則

(事務所)

第2条

(旧) この法人は、主たる事務所を東京都千代田区飯田橋3丁目11番5号20山京ビル1105号室に置く。

↓

(変更) この法人は、主たる事務所を東京都千代田区飯田橋2丁目11番5号人材開発ビル4階に置く。

6. 花岡文雄第34回年会会長より、年会開催状況の報告と挨拶がなされた。

本年会は、キャッチコピー「分子からヒトへ ―メカニズムを知り、コントロールする―」のもと、「基礎研究と応用研究の基軸としての分子生物学」をテーマに約2年前から準備を進めてきた。一般演題投稿数は3,462題(うちLate-breaking abstracts投稿は179題)、本日、12月16日(金)10:00現在の参加者数は8,035名となり、順調に年会運営が進んでいることが報告された(最終的には8,320の参加者となった)。

会員諸氏のご協力に感謝したい。

7. 篠原 彰第35回年会プログラム委員長(阿形清和第35回年会会長代理)より、2012年の年会開催企画案につき報告がなされた。

・会期：2012年12月11日(火)～14日(金)

・会場：福岡国際会議場、福岡サンパレス、マリンメッセ福岡

・年会組織：年会会長 阿形清和(京大)、組織委員長 諸橋憲一郎(九大)、プログラム委員長 篠原 彰(阪大)、プログラム副委員長 見学美根子(京大)、財務・渉外委員長 小安重夫(慶應大)、運営・庶務委員長 巖佐庸(九大)

・年会コンセプトと企画、運営について

第35回年会は、“～年会の新しいスタイルを模索する～”をキャッチコピーとして、将来の年会モデルを構築することを重要なミッションと考えている。単独開催で小回りが利く点を活かし積極的にIT化を取り入れることで、年会において会員間の新たなコミュニケーション方法の創出を図ることを検討中である。

シンポジウムを一本化することで普段聞けない話

を聞く機会を提供して、ブレインストーミングの場を造りたい。また、ポスター発表者のショートプレゼンテーションのための特別会場を設置し、若手がFace to Faceで議論し、様々な刺激を受けられる年会を目指したいとの説明がなされた。

組織委員会では、モバイル端末（スマートフォン）を利用した様々な試みを検討中であり、会員各位においては、第35回年会事務局あてにぜひアイデアを出してほしい旨説明がなされた。アイデア・意見の送り先などについては、次号の会報（2012年2月号）に掲載（アイデア公募を記載したフライヤーを同封）する予定である。

8. 升方議長より閉会の挨拶があり、第34回総会が終了した。

上記、平成24年度通常総会の議決および確認事項を明確にするため、この議事録を作成し、議事録署名人はここに記名押印する。

平成23年12月16日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
平成24年度通常総会
議 長 升 方 久 夫 ㊟
議事録署名人 小 原 雄 治 ㊟
議事録署名人 花 岡 文 雄 ㊟

平成 23 年度 (2011 年度) 収支決算報告

平成 23 年度 (2011 年度) 収支決算報告書

平成 22 年 10 月 1 日から平成 23 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	予算額	決算額	備 考
I 収入の部			
1 入会金収入	1,000,000	1,141,000	
正 会 員	200,000	372,000	
学生会員	800,000	769,000	被災申請に対応し、2011 年度の入会金を免除 (学生会員)
2 会費収入	71,190,000	64,141,000	
正 会 員 (海外在住含む)	58,500,000	55,123,500	
学生会員 (海外在住含む)	11,130,000	7,577,500	被災申請に対応し、2011 年度の会費を免除 (学生会員)
賛助会員	1,560,000	1,440,000	
3 事業収入	196,180,000	222,572,249	
①分子生物学・学術研究事業	186,680,000	210,518,179	
年会	186,180,000	210,028,737	BMB2010 収支より繰り入れ (分子生物学会の案分比率は 6 割)
春季シンポジウム	500,000	489,442	第 11 回春季シンポジウム (助成金、懇親会費等)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	9,500,000	12,004,070	
Genes to Cells 出版収入	9,000,000	11,900,540	Profit Share 10,900,540 円 2010 年分編集補助金 1,000,000 円
30 周年記念出版収入	500,000	103,530	「なぜなぜ生物学」印税
③その他の事業	0	50,000	
その他の事業	0	50,000	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	1,300,000	三菱化学より (奨励賞副賞、選考経費)
5 雑収入・預金利息	200,000	101,519	利息収入、出版社著作権管理機構からの分配金
当期収入合計 (A)	269,870,000	289,255,768	
前期繰越収支差額	155,924,838	155,924,838	
収入合計 (B)	425,794,838	445,180,606	
II 支出の部			
1 事業費	214,830,000	215,170,938	
①分子生物学・学術研究事業	196,680,000	199,823,237	< 学術集会の開催等 >
年会	186,180,000	189,896,029	BMB2010 収支より繰り入れ (分子生物学会の案分比率は 6 割)
〃	5,000,000	5,000,000	定額補助金支出
春季シンポジウム	5,500,000	4,927,208	第 11 回春季シンポジウム (金沢)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	12,350,000	11,285,234	
会報刊行費	4,000,000	3,159,188	会報 97、98、99 号
Genes to Cells 編集費	2,000,000	1,941,381	編集経費については年 800 万円まで出版社負担
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	4,350,000	
ホームページ関係費	2,000,000	1,834,665	ホームページ 10 万円 × 12 カ月 + メール配信費用
③その他の事業	5,800,000	4,062,467	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	1,043,611	
男女共同参画事業費	1,500,000	735,216	
創立 30 周年記念・出版事業	1,000,000	252,000	なぜなぜ生物学、分子生物学に魅せられた人々、学会買取分
事業費その他	1,000,000	1,490,840	・若手教育 WG/ シンポ 1,243,205 円・生科連会費、その他
事業費・予備費	1,000,000	540,800	科学政策懇談会会議費、富澤基金 / 記者会見経費
2 管理費	50,790,000	50,301,115	
事務所賃料	2,800,000	3,287,630	賃料 (2011.4 月震災対応による移転)・共益費、光熱費
給与手当	23,500,000	23,145,595	2011 年 3 月より非常勤職員 1 名増員 (事務局スタッフは 4 名)
法定福利費	2,900,000	3,499,528	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	50,000	58,359	職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	1,356,600	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,500,000	2,373,000	会員管理サーバの運用・保守
システム開発費 (カード決済) 精算分	960,000	966,000	
印刷費	1,700,000	1,504,488	総会資料、総会委任状ハガキ、会費請求書の出力等含む
通信運搬費	10,000,000	9,323,663	
旅費交通費	2,300,000	2,031,720	
会議費	500,000	332,011	新理事会準備会 (2010.10 月)、定例理事会、その他
支払手数料	300,000	218,615	
消耗品費	900,000	784,174	封筒印刷代含む
雑費	800,000	1,335,393	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、その他
減価償却費	80,000	84,339	電話機、コピー FAX 複合機
3 租税公課	2,000,000	1,344,600	納税済 655,600 円 未払消費税 615,000 円 地方税 70,000 円
4 特定預金支出	1,150,000	1,159,000	退職給付引当金繰入 (規程に準拠) 印紙代 4,000 円
5 予備費	1,000,000	588,125	学会事務所移転経費 (電気工事一式、移転作業、電源設置)
当期支出合計 (C)	269,770,000	268,563,778	
当期収支差額 (A) - (C)	100,000	20,691,990	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	156,024,838	176,616,828	

(単位：円)

平成 23 年度（2011 年度）貸借対照表

平成 23 年 9 月 30 日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金	304,808,623	
前払費用	4,668,209	
立替金	8,050,244	
流動資産合計		317,527,076
2 固定資産		
工具器具備品	2	
敷金	1,802,000	
固定資産合計		1,802,002
資産合計		319,329,078
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金	83,921	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	615,000	
前受会費	386,000	
前受金	1,000,000	
預り金 1 (若手研究助成 富澤基金)	135,479,149	
預り金 2	219,180	
流動負債合計		137,853,250
2 固定負債		
退職給付引当金	4,859,000	
固定負債合計		4,859,000
負債合計		142,712,250
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産		155,924,838
当期正味財産増加額		20,691,990
正味財産合計		176,616,828
負債及び正味財産合計		319,329,078

(単位：円)

平成23年度(2011年度)財産目録

平成23年9月30日現在

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産		
現金預金		
現金	331,815	
郵便振替 00100-2-465016	34,820	
郵便振替 00110-1-901302	24,291,670	
郵便振替 00130-8-734434	0	
普通預金 三菱東京UFJ銀行 春日町支店	1,573,108	
普通預金 三菱東京UFJ銀行 所沢支店	871,393	
普通預金 三菱UFJ信託銀行 上野支店	208,982	
普通預金 三井住友銀行 飯田橋支店	65,565,182	
普通預金 中央三井信託銀行 本店営業部	7,185,014	
普通預金 静岡銀行 東京支店	35,479,149	
定期預金 三菱東京UFJ銀行 春日町支店	10,103,731	
定期預金 みずほ銀行 本郷支店	10,083,503	
定期預金 三井住友銀行 飯田橋支店	10,000,000	
定期預金 三菱UFJ信託銀行 上野支店	10,000,000	
定期預金 中央三井信託銀行 本店営業部	10,000,000	
定期預金 住友信託銀行 東京営業部	19,080,256	
定期預金 静岡銀行 東京支店	100,000,000	
前払費用 事務所家賃10月分	306,750	
前払費用 事務所火災保険 H23.10-H24.8月分	11,459	
前払費用 2011年分 Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	
立替金 編集経費(2011年1月分以降)	8,050,244	
流動資産合計		317,527,076
2 固定資産		
工具器具備品 電話取付一式	1	
工具器具備品 複合機	1	
敷金 学会事務所・編集室	1,802,000	
固定資産合計		1,802,002
資産合計		319,329,078
II 負債の部		
1 流動負債		
未払金 通信運搬費9月分 (外部倉庫、宅急便代、NTT、メールサーバ)	28,460	
未払金 印刷費(コピー・FAX代8-9月分)	21,793	
未払金 クレジットカード決済処理手数料(GMO)	33,668	
未払法人税等	70,000	
未払消費税	615,000	
前受会費 平成24年度以降会費	386,000	
前受金 GTC 編集費・出版社補助金	1,000,000	
預り金1 若手研究助成 富澤基金	135,479,149	
預り金2 源泉所得税、雇用保険	219,180	
流動負債合計		137,853,250
2 固定負債		
退職給付引当金	4,859,000	
固定負債合計		4,859,000
負債合計		142,712,250
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産	155,924,838	
当期正味財産増加額	20,691,990	
正味財産合計		176,616,828
負債及び正味財産合計		319,329,078

(単位：円)

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

平成 23 年（2011 年度）会計報告

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

●平成 23 年度（2011 年度）富澤基金 決算報告書

平成 22 年 10 月 1 日から平成 23 年 9 月 30 日まで

科 目	決 算 額	備 考
収入の部		
預金利息	72,203	
当期収入合計	72,203	
前期繰越金	153,985,300	
合 計	154,057,503	
支出の部		
研究助成金	18,000,000	第 1 回研究助成者は 6 名（1 人 300 万円）
選考経費 / 会場費	212,649	第 1 回基金運営委員会（2010.11）ヒアリング（2011.5）
選考経費 / 旅費	322,600	〃
事務・雑費	43,105	送金手数料、貸金庫使用料（静岡銀行）、航空保険代（3/18 ヒアリング延期）
当期支出合計	18,578,354	
次期繰越金	135,479,149	
合 計	154,057,503	

●平成 23 年度（2011 年度）富澤基金 貸借対照表

平成 23 年 9 月 30 日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
資産の部		負債の部	
普通預金	35,479,149	流動負債	0
定期預金	100,000,000	基金会計（期首）	153,985,300
		今年度収支差額	-18,506,151
		基金正味財産	135,479,149
合 計	135,479,149	合 計	135,479,149

●平成 23 年度（2011 年度）富澤基金 財産目録

平成 23 年 9 月 30 日現在

科 目	摘 要	金 額
普通預金	静岡銀行 東京支店	35,479,149
定期預金	静岡銀行 東京支店	100,000,000
合 計		135,479,149

平成 23 年度（2011 年度）個別注記表

平成 22 年 10 月 1 日から平成 23 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

1. 固定資産の減価償却の方法
定率法によっております。
2. 固定資産の減価償却累計額
955,845 円
3. 退職給付引当金の計上基準
職員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務の見込額に基づき、
当年度末において発生していると認められる額を計上しております。
4. 担保に供している資産はありません。
5. 保証債務はありません。

【監査報告】

平成 23 年度（2011 年度）決算に関して、平成 23 年 11 月 4 日、独立監査人 宮城秀敏公認会計士の監査を受けました。その計算書類が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、平成 23 年度の収支及び正味財産増減の状況並びに同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。との監査報告書の提出を受けました。その後、同年 11 月 15 日に、学会事務所において、勝木元也監事、町田泰則監事による監査を終了しました。（両監事による会計監査は、帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きにより行われた。）ここにご報告いたします。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
第 17 期理事長 小 原 雄 治
理事（会計幹事）塩 見 春 彦

独立監査人の監査報告書

平成23年11月4日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 小原 雄治 殿

宮城公認会計士事務所

宮城 完成 啓 殿
公認会計士

私は、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の 平成22年10月1日から平成23年9月30日までの平成23年度の計算書類、すなわち、収支決算報告書、貸借対照表及び財産目録並びに平成22年10月1日から平成23年9月30日までの平成23年度の富澤基金 会計報告、すなわち、富澤基金 決算報告書、貸借対照表及び財産目録について監査を行った。この計算書類及び会計報告の作成責任は理事者であり、私の責任は独立の立場から計算書類及び会計報告に対する意見を表明することにある。

私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に計算書類及び会計報告に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積り等の評価も含めた全体としての計算書類及び会計報告の表示を検討することを含んでいる。私は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

私は、上記の計算書類及び会計報告が、我が国において一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して、特定非営利活動法人 日本分子生物学会 の平成23年度の収支、正味財産増減の状況及び同年度末日現在の財政状態並びに 富澤基金 の平成23年度の収支及び同年度末日現在の財政状態をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

特定非営利活動法人 日本分子生物学会 と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

監査報告書

特定非営利活動法人 日本分子生物学会
理事長 小原 雄治 殿

平成23年11月15日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 勝本元也 殿

平成23年11月15日

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

監事 所田泰則 殿

私たちは、日本分子生物学会の平成23年度における財産並びに収支の状況について監査を行った。帳簿並びに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続きを用いて計算書類の正確性を検討した結果、計算書類は、財産並びに収支の状況を正しく示しているものと認める。

以上

平成 24 年度 (2012 年度) 収支予算

平成 24 年度 (2012 年度) 収支予算

平成 23 年 10 月 1 日から平成 24 年 9 月 30 日まで

特定非営利活動法人 日本分子生物学会

科 目	24 年度予算	備 考
I 収入の部		
1 入会金収入	1,100,000	
正 会 員	300,000	1,000 円 × 300 名
学生会員	800,000	1,000 円 × 800 名
2 会費収入	71,190,000	
正 会 員 (海外在住含む)	58,500,000	6,500 円 × 10,000 名 × 約 90%
学生会員 (海外在住含む)	11,130,000	3,000 円 × 5,300 名 × 約 70%
賛助会員	1,560,000	40,000 円 × 39 口 (36 社)
3 事業収入	236,130,000	
①分子生物学・学術研究事業	226,130,000	<学術集会の開催等>
年会	224,630,000	第 34 回年会 (支出予算額 - 学会補助金定額分 500 万円)
春季シンポジウム	1,500,000	第 12 回春季シンポジウム (スクール形式 / 石和温泉)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	10,000,000	
Genes to Cells 出版収入	9,500,000	ワイリーブラックウェル社より Profit Share 850 万円、編集定額補助金 100 万円
30 周年記念出版収入	500,000	著作権使用料 (東京化学同人)
③その他の事業	0	
その他の事業	0	
4 助成金・補助金収入	1,300,000	三菱化学より、奨励賞副賞および選考経費として
5 雑収入	500,000	利息収入、出版社著作権管理機構分配金、ファーマバイオ (Bioedit 英文校正) 等
当期収入合計 (A)	310,220,000	
前期繰越収支差額	176,610,000	※ 23 年度決算の繰越金概算とした。
収入合計 (B)	486,830,000	
II 支出の部		
1 事業費	260,580,000	
①分子生物学・学術研究事業	243,130,000	<学術集会の開催等>
年会	229,630,000	第 34 回年会 (定額補助金 500 万円は収入科目の中で精算) * 実質 500 万円を補助
春季シンポジウム	6,500,000	市民公開講座費用を含む
国際会議支援 (補助金)	7,000,000	2013 年開催の国際会議への支援 (補助金)
②普及啓発事業 (HP・刊行物等)	11,850,000	
会報刊行費	3,500,000	
Genes to Cells 編集費	2,000,000	学会負担分 (編集費用 1000 万円のうち 800 万円は出版社負担精算へ)
Genes to Cells オンライン費用	4,350,000	ワイリーブラックウェル社へ支払い (フリーアクセス料 100 万円を含む)
ホームページ関係費	2,000,000	10 万円 × 12 カ月、メール配信 60 万円、予備費 20 万円
③その他の事業	5,600,000	
三菱化学奨励賞関係費	1,300,000	
男女共同参画事業費	1,500,000	年会・ランチョンワークショップ弁当を含む
若手教育問題WG	1,200,000	年会・若手教育ランチョンセミナー弁当を含む
創立 30 周年記念・出版事業	300,000	「21 世紀の分子生物学」学会買取分 (100 部) 含む、学術事業企画委員会
社会貢献活動	500,000	
事業費その他	500,000	科学政策、他
理事選挙	300,000	選挙システムブラウザー調整
2 管理費	52,550,000	
事務所賃料	3,800,000	賃料、管理費、光熱費等含む
給与手当	24,000,000	事務局スタッフ 4 名 (2011 年 3 月より非常勤職員 1 名増)
法定福利費	3,700,000	社会保険料・雇用保険等事業者負担分
福利厚生費	50,000	雇用職員健康診断等
業務委託費	1,500,000	公認会計士監査料、会計事務所顧問料、税務申告費用
会員管理システム運用管理費	2,400,000	サーバー運用保守、UFJ 社決済基盤使用料含む
印刷費	1,700,000	会費請求書出力含む
通信運搬費	10,000,000	会報、年会プログラム集、会費請求書の送料
旅費交通費	2,300,000	理事会、委員会、執行部打合せ、他
会議費	500,000	理事会、委員会、他
支払手数料	300,000	
消耗品費	900,000	封筒印刷代含む
雑費	1,400,000	国内・海外会費クレジットカード決済手数料、外部倉庫代、他
3 租税公課	2,000,000	消費税、法人税等
4 特定預金支出	1,200,000	退職給付引当金
5 予備費	500,000	
当期支出合計 (C)	316,830,000	
当期収支差額 (A) - (C)	-6,610,000	
次期繰越収支差額 (B) - (C)	170,000,000	

(単位：円)

学術賞、研究助成の本学会推薦について

本学会に推薦依頼あるいは案内のある学術賞、研究助成は、本号に一覧として掲載しております。そのうち、応募にあたり学会等の推薦が必要なものについての本学会からの推薦は、賞推薦委員会または研究助成選考委員会の審査に従って行います。応募希望の方は、直接助成先に問い合わせ、申請書類を各自お取寄せのうえ、ふるってご応募下さい。

本学会への推薦依頼の手続きは次の通りです。

1. 提出物

- 1) 本申請に必要な書類（オリジナルおよび募集要項に記載されている部数のコピー）
- 2) 本学会の選考委員用および学会用控に、上記申請書類のコピー計6部
- 3) 申込受付確認のための返信封筒（返信用の宛名を記入しておいて下さい）
- 4) 論文（別刷は各種財団等応募先の必要部数をご用意下さい。委員会用の論文は不要です）

2. 提出先

※賞推薦についての送付先

日本分子生物学会・賞推薦委員長 小安 重夫
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

※研究助成についての送付先

日本分子生物学会・研究助成選考委員長 西田 栄介
〒102-0072 千代田区飯田橋 2-11-5
人材開発ビル 4階
日本分子生物学会事務局気付

3. 提出期限

財団等の締切りの1カ月前まで。提出期限後に受取った場合や、提出書類が不備な場合は、選考の対象にならないことがあります。推薦手続きのことでご不明な点がございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

研究助成一覧

名称	連絡先	件数	締切	助成内容等	概要
第43回三菱財団自然科学研究助成	(財)三菱財団 ☎ (03) 3214-5754 〒100-0005 千代田区丸の内2-3-1	総額2億5,000万円、 40件程度	2012年 2月3日	1件当たり 2,000万円まで	自然科学の基礎となる独創的、かつ先駆的研究とともに、すぐれた着想で新しい領域を開拓する萌芽ともなる研究（原則として個人研究）。
山田科学振興財団2012年度研究援助	(財)山田科学振興財団 ☎ (06) 6758-3745 〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1	15件程度 (本学会の推薦枠は5件)	2012年 2月29日	1件当たり 100～500万円、 総額3,000万円	自然科学の基礎的研究に対しての研究費援助。 「推薦書は山田財団HPよりダウンロード [http://www.yamadazaidan.jp/]」
第28回国際生物学賞	国際生物学賞委員会 ☎ (03) 3263-1722 〒102-8472 千代田区一番町8 日本学術振興会内	1件 (1件)	2012年* 5月11日	賞状、賞牌、 1,000万円	生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術進歩に大きな貢献をした研究者。第27回の授賞分野は「発生生物学」。
第29回持田記念学術賞	(財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒160-0003 新宿区本塩町7-6 四谷ワイズビル	2件以内 (1件)	2012年* 7月27日	1件 1,000万円	学術賞は次の6項目の研究分野で、研究の進歩発展のため顕著な功績のあった研究者に贈呈。 (1)バイオ技術を基盤とする先端医療に関する研究 (2)バイオ技術を基盤とするゲノム機能/病態解析に関する研究 (3)免疫/アレルギー/炎症の治療ならびに制御に関する研究 (4)循環器/血液疾患の病態解析/治療制御に関する研究 (5)創薬・創剤の基盤に関する研究 (6)創薬の臨床応用に関する研究
第30回研究助成		総額 2億4,000万円	2012年* 6月22日	1件 300万円	
第29回国内および海外留学補助金	(財)持田記念医学薬学振興財団 ☎ (03) 3357-1282 〒160-0003 新宿区本塩町7-6 四谷ワイズビル	総額 1,000万円	2012年* 6月22日	1件 50万円	
平成25年度笹川科学研究助成	(財)日本科学協会 ☎ (03) 6229-5365 〒107-0052 港区赤坂1-2-2 日本財団ビル	約330件	募集期間 2012年* 10月1日 ～ 10月15日	1件当たり100万円まで	人文・社会科学および自然科学(医学を除く)の研究計画に関するもの。4月1日現在、35歳以下の若手研究者へ助成。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
上 原 賞	(財)上原記念生命科学財団 ☎ (03) 3985-3500 〒 171-0033 豊島区高田 3-26-3	2件以内 (1件)	2012年* 9月7日	金牌、 2,000万円	生命科学の栄養学、薬学、基礎および臨床医学、社会医学、東洋医学で顕著な業績を挙げ、引き続き活躍中の研究者。
第29回井上學術賞	(財)井上科学振興財団 ☎ (03) 3477-2738 〒 150-0036 渋谷区南平台町 15-15-601	5件以内 (2件)	2012年* 9月21日	賞状、金メダル、 200万円	自然科学の基礎的研究で特に顕著な業績を挙げた者(ただし締切日現在満50歳未満)。
第5回井上リサーチアワード		3名以内 (うち1名以上女性研究者)	2012年* 7月31日	1人当たり 1,000万円 (研究期間は2年)	開拓的発展を目指す若手研究者の独創性と自立を支援する目的で、研究を助成。期間は2年。
第21回木原記念財団 學術賞	(財)木原記念横浜生命科学振興財団 ☎ (045) 502-4810 〒 230-0045 横浜市鶴見区末広町 1-6	1件 (1件)	2012年* 9月28日	賞状、記念牌、 200万円	最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、原則として締切日現在50歳以下の者。
木原記念財団特別賞 (平成20年より新設)		1件 (1件)	2012年* 9月28日	賞状、記念牌、 100万円	生命科学の分野で独創的かつ社会的貢献に繋がる研究を行っている若手研究者で50歳以下の者。推薦の研究課題で他の著名な賞を受けていない者。
住友財団2012年度基礎科学研究助成	(財)住友財団 ☎ (03) 5473-0161 〒 105-0012 港区芝大門 1-12-6 住友芝大門ビル 2号館	総額 1億6,000万円 100件程度	2012年* 6月29日	1件当たり500万円まで	理学(数学、物理学、化学、生物学)の各分野及びこれらの複数にまたがる分野の基礎研究で萌芽的なもの。若手研究者(個人またはグループ)を対象とする。
第53回藤原賞	(財)藤原科学財団 ☎ (03) 3561-7736 〒 104-0061 中央区銀座 3-7-12	2件 (1件)	2012年 1月31日	副賞1,000万円	推薦の対象は自然科学分野に属するもの。わが国に国籍を有し、科学技術の発展に卓越した貢献をした者。
平成25年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞	文部科学省 研究振興局振興企画課奨励室 ☎ (03) 6734-4071 〒 100-8959 千代田区霞が関 3-2-2	科学技術賞140件(年)のうち、研究部門は40件程度 若手科学者賞は100名程度(学会推薦枠は定まっていないが推薦は若干名まで)	2012年* 7月20日	表彰状及び副賞	我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は発明を行った個人又はグループを表彰。 萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた40歳未満の若手研究個人。
平成24年度鳥津賞	(財)鳥津科学技術振興財団 ☎ (075) 823-3240 〒 604-8445 京都市中京区 西ノ京徳大寺町 1	1件 (推薦枠は若干件)	2012年* 9月28日	賞状、賞牌、 副賞300万円	科学技術、主として科学計測およびその周辺の領域における基礎的な研究において、近年著しい成果をあげた功労者を対象とする。
鳥津科学技術振興財団研究開発助成		総額 1,000万円	2012年* 9月28日	1件当たり 100万円以下	上記同様を研究対象とする、国内の研究機関に所属する45歳以下の新進気鋭の日本人研究者。
東レ科学技術賞	(財)東レ科学振興会 ☎ (047) 350-6103 〒 279-8555 浦安市美浜 1-8-1 東レビル	2件前後 (2件)	2012年* 10月5日	1件につき 賞状、金メダル、 500万円	学術上の業績顕著な者、学術上重要な発見をした者、重要な発明により効果が大い者、技術上の重要問題を解決し貢献が大い者。
東レ科学技術研究助成		総額 1億3,000万円 10件程度 (2件)	2012年* 10月5日	特に定めず最大 3,000万円程度 まで	今後の研究の成果が科学技術の進歩・発展に貢献するところが大きいと考えられる、独創的、萌芽的な研究を活発に行っている若手研究者(原則として45歳以下)。
ノバルティス研究奨励金	(財)ノバルティス科学振興財団 ☎ (03) 5464-1460 〒 106-0031 港区西麻布 4-16-13 西麻布 28 森ビル 10F	約35件 指定機関からの推薦必要	2012年* 9月14日	1件 100万円	生物・生命科学およびそれに関連する化学の領域における創造的な研究に対して助成。
第44回内藤記念科学振興賞	(財)内藤記念科学振興財団 ☎ (03) 3813-3005 〒 113-0033 文京区本郷 3-42-6 NKDビル 8階	1件 (1件)	2012年* 10月1日	金メダル、 1000万円	人類の健康の増進に寄与する自然科学の基礎的研究において、独創的テーマに取り組み、その進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
第44回海外学者招へい助成金		(前期・後期各10件)	2012年* 6月1日・ 10月1日	1件 20~80万円まで(エリアによる)	同上のテーマに取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者を招へいする受入れ責任者に贈呈。

名 称	連 絡 先	件 数	締 切	助成内容等	概 要
ブレインサイエンス財団研究助成	(財)ブレインサイエンス振興財団 ☎ (03) 3273-2565 〒 104-0028 中央区八重洲 2-6-20	8～12 件	2012 年* 10 月 12 日	1 件 100 万円	ブレインサイエンス研究分野における独創的な研究計画への助成。
塚原伸晃記念賞		1 件		1 件 100 万円	生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている 50 歳以下の研究者。
海外派遣研究助成		若干件	2013 年* 1 月 11 日	1 件 30 万円まで	ブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間の研究者の派遣を助成。
海外研究者招聘助成		若干件		1 件 30 万円まで	同分野において独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間の招聘を助成。
平成 25 年度研究助成	(財)長瀬科学技術振興財団 ☎ (06) 6535-2117 〒 550-8668 大阪市西区新町 1-1-17	10 数件	2012 年* 11 月 30 日	1 件 250 万円以内	生化学および有機化学等の分野において研究活動を行う研究者または研究機関。
第 9 回日本学術振興会賞	(独)日本学術振興会 ☎ (03) 3263-0912 〒 102-8472 千代田区一番町 8 番地	25 件程度 (機関長推薦 扱いとして 学会推薦枠 も若干件あり)	2012 年* 5 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110 万円	人文、社会科学及び自然科学にわたる全分野が対象。博士の学位を取得しており、国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められた研究者 (45 歳未満)。
第 3 回日本学術振興会育志賞		16 件程度 (1 件)	2012 年* 6 月中旬 (受付日指定)	賞状、賞碑、 110 万円	我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士課程の学生を顕彰 (34 歳未満)。
(財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞	(財)材料科学技術振興財団 ☎ (03) 3415-2200 〒 157-0067 世田谷区喜多見 1-18-6	各分野 1 件	2012 年 4 月 27 日	賞状、金メダル、 300 万円	授賞対象は、「材料」、「半導体及び半導体装置」、「計測評価」、「バイオサイエンス・バイオテクノロジー」の 4 分野からなり、論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発等を通じて、実用化につながる優れた業績をあげている者。
平成 24 年度研究助成	(財)光科学技術研究振興財団 ☎ (053) 454-0598 〒 430-0926 浜松市中区砂山町 325-6	総額 5,000 万円	2011 年* 8 月 31 日	助成金総額 約 5,000 万円	光科学に関係する研究に対して助成。対象課題有り。
2012 年度朝日賞	(財)朝日新聞文化財団 ☎ (03) 5540-7453 〒 104-8011 中央区築地 5-3-2	ここ最近 は 4～5 件 (1 件)	2012 年* 8 月 31 日	正賞(ブロンズ像) と副賞 500 万円	学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、わが国の文化、社会の発展、向上に多大の貢献をされた個人または団体に贈られる。
第 24 回加藤記念研究助成	(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 ☎ (042) 725-2576 〒 194-8533 町田市旭町 3-6-6	25 件 総額 5,000 万円	2012 年* 8 月 31 日	1 件 200 万円	バイオサイエンス分野における有能な若手研究者を発掘し、その創造的かつ先駆的研究を支援する。年齢制限あり。
平成 25 年度(第 1 回)三島海雲学術賞	(財)三島海雲記念財団 ☎ (03) 3780-2317 〒 150-0021 渋谷区恵比寿西 2-20-3 代官山 CA ビル	自然科学部門 で 2 件以内 (1 件)	2012 年* 8 月 31 日	1 件 200 万円	自然科学部門は、食の科学に関する研究が対象。国内外の学術誌等に公表された論文、著書、その他の研究業績により独創的で発展性のある顕著な業績を挙げている 40 歳以下の若手研究者。

●件数の () 内は、応募に当たり学協会等からの推薦が必要な場合、本学会の推薦枠を示しています。

*は、本年度の案内を受取っておらず、昨年締切日を参考に示してあります。

締切日を過ぎているものは、本年度応募は終了していますが、参考資料として掲載しました。

●学会推薦した会員が財団等の研究助成対象者となった場合には、その研究成果を将来、学会誌「Genes to Cells」に論文あるいは総説として発表して頂くように要請いたします。応募に際しては、その旨をご了解くださるようお願いいたします。

各種学術集会、シンポジウム、講習会等のお知らせ

○第7回トランスポーター研究会年会

主催：トランスポーター研究会
日時：2012年6月9日(土)～10日(日)
会場：京都大学農学部
代表世話人：松尾 道憲（京都大学大学院農学研究科）

プログラム：

[特別講演] 藤吉 好則(京都大学大学院理学研究科)、
植田 和光(京都大学 iCeMS)

[シンポジウム]

- (1) 脂質のトランスポーター～遅れてきたライジングスターズ
 - (2) 金属トランスポーターの生物学：メタルが奏でる生命科学の新しい展開
 - (3) 細菌トランスポーター
 - (4) 疾患原因および薬物標的としての膜輸送分子
- [ポスターによる一般演題] 優秀演題賞等を選考

演題応募締切：2012年4月28日(金) トランスポーターに限らず、物質輸送を担う膜分子または関連する分子に関する一般演題を広く募集します。

参加費：学生(院生含む) 3,000円、一般 5,000円、幹事・世話人 6,000円(当日受付は各 2,000円増となります)

参加申込：事前参加の締切は、2012年4月28日(金)です。振込先や参加登録の詳細は、トランスポーター研究会のホームページ(<http://www.jtra.jp/>)をご覧ください。

問い合わせ先：

〒606-8502
京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院生命科学研究所生体情報応答学分野内 第7回トランスポーター研究会事務局長 神戸 大朋
Tel：075-753-6273
Fax：075-753-6274
E-mail：jtra7@lif.kyoto-u.ac.jp

○The 9th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference (APMBC2012) のお知らせ

The 9th Asia-Pacific Marine Biotechnology Conference (APMBC2012) を以下の要領で開催致します。皆様の

ご参加をお待ちしております。

会期：2012年7月13日(金)～16日(月)(海の日)

会場：高知市文化プラザ かるぼーと
(〒780-8529 高知市九反田2-1)

大会役員：組織委員長 深見公雄(高知大学 副学長)
：庶務幹事 富永 明(高知大学 総合科学系黒潮圏科学部門)
：庶務幹事 津田正史(高知大学 総合科学系複合領域科学部門)

●大会の内容

1. 一般講演(口頭発表・ポスター発表)
2. 一般公開シンポジウム

●発表形式

1. 口頭発表：一般講演は講演15分、質疑5分、(PowerPointによる液晶プロジェクター映写のみとする)、
2. ポスター発表
3. ポスター口頭発表：学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定
4. 口頭発表、ポスター口頭発表とも、英語による発表とします。

●一般講演のセッション

- Metagenomics
- Biotechnology of Macroalgae
- Biotechnology of Microalgae
- Marine Microbiology
- Extremophiles
- Marine Viruses
- Bioactivity of Marine Organisms
- Marine Bioactive Compounds
- Marine Bioproducts
- Biotechnology of Fishery Products
- Marine Toxins
- Biotechnology for Environmental Science
- Biotechnology for Aquaculture
- Biomineralization
- Biotechnology of Deep Seawater
- Biotechnology for Energy Production

●講演申し込み方法

❖発表希望者は、web上よりお申し込み下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

❖発表申し込みの締め切り 平成24年3月30日

●参加登録方法

❖参加登録希望者は、web上よりお申し込み下さい。

詳細は大会ホームページでご確認下さい。

❖早期参加登録の締め切り 平成 24 年 5 月 31 日

❖参加登録費

支払期限	早期参加登録	早期参加登録以降～当日
	H24 5/31 まで	H24 6/1 以降
一般参加者	¥35,000	¥40,000
学生	¥10,000	¥15,000

* Tax Included.

参加登録費には、ウェルカムレセプション、講演展示会への参加、ランチ（14 日、15 日）、要旨集、コーヒープレイクが含まれます。

JSMB 学会ホームページ：

<http://marinebiotechnology.jp/>

APMBC2012 ホームページ：

<http://www.kochi-u.ac.jp/9apmbc/>

• お問い合わせ先

The 9th APMBC 事務局

〒 783-8502

南国市物部乙 200 高知大学 海洋コア総合研究センター

E-mail : apmbc-9@kochi-u.ac.jp

TEL&FAX : 088-864-6720

第17期役員・幹事・各委員会名簿

理事長

小原 雄治 (遺伝研)

(任期：2011年1月1日～2012年12月31日)

副理事長

相沢 慎一 (理研・CDB)

大隅 典子 (東北大・医)

理事

阿形 清和 (京大・理)

五十嵐和彦 (東北大・医)

上田 泰己 (理研・CDB)

影山龍一郎 (京大・ウイルス研)

後藤由季子 (東大・分生研)

塩見 春彦 (慶應大・医)

杉本亜砂子 (東北大・生命)

谷口 維紹 (東大・医)

永田 恭介 (筑波大・人間総合科学)

鍋島 陽一 (先端医療財団先端医療センター)

花岡 文雄 (学習院大・理)

水島 昇 (東医歯大・医歯)

柳田 充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

米田 悦啓 (阪大・生命機能)

審良 静男 (阪大・IFReC)

石川 冬木 (京大・生命)

貝淵 弘三 (名大・医)

五條堀 孝 (遺伝研)

小安 重夫 (慶應大・医)

白髭 克彦 (東大・分生研)

田中 啓二 (都医学研)

月田早智子 (阪大・生命機能)

中山 敬一 (九大・生医研)

西田 栄介 (京大・生命)

三浦 正幸 (東大・薬)

宮園 浩平 (東大・医)

山本 雅之 (東北大・医)

(50音順)

監事

勝木 元也 (自然科学研究機構)、町田 泰則 (名大・理)

幹事

庶務幹事 石野 史敏 (東医歯大・難治研)

会計幹事 塩見 春彦 (慶應大・医)

編集幹事 上村 匡 (京大・生命)

広報幹事 荒木 弘之 (遺伝研)、篠原 彰 (阪大・蛋白研)

集会幹事 柳澤 純 (筑波大・TARAセンター / 第34回年会)、諸橋憲一郎 (九大・医 / 第35回年会)

Genes to Cells 編集長

柳田充弘 (沖縄科学技術大学院大学)

Genes to Cells 将来計画ワーキンググループ

荒木弘之、林 茂生、平岡 泰、宮園浩平

賞推薦委員会

小安重夫 (委員長)、相沢慎一、石川冬木、大隅典子、水島 昇

研究助成選考委員会

西田栄介 (委員長)、五條堀孝、月田早智子、三浦正幸、山本雅之

男女共同参画委員会

後藤由季子 (委員長)、塩見春彦 (副委員長)、井関祥子、大杉美穂、佐藤 健、篠原美紀、竹内 純、原 英二、本間美和子

研究倫理委員会

花岡文雄 (委員長)、岡田清孝、田中啓二

〈研究倫理委員会下部組織〉

若手教育問題ワーキンググループ

小林武彦 (WG座長)、上村 匡、後藤由季子、斎藤通紀、塩見美喜子、白髭克彦

学術事業企画委員会 (30周年記念出版)

永田恭介 (委員長)、伊藤耕一、稲田利文、入江賢児、塩見春彦、島本 功、菅澤 薫、中尾光善、林 茂生、三浦正幸、渡邊嘉典

「日本分子生物学会 若手研究助成 富澤純一・桂子基金」

基金運営委員会 (任期：2010年10月1日～2014年12月31日)

山本正幸 (委員長)、岡田清孝 (副委員長)、阿形清和、近藤 滋、塩見美喜子、嶋本伸雄、谷口維紹、小原雄治 (職指定委員)

国際会議支援・選考委員会 (2012年1月発足)

西田栄介 (委員長)、篠原 彰、杉本亜砂子、月田早智子、三浦正幸

科学政策委員会 (2011年12月発足)

阿形清和、見淵弘三、小原雄治、小安重夫、篠原 彰、田中啓二、
谷口維紹、中山敬一、水島 昇、柳田充弘

〈科学政策委員会下部組織〉(2012年1月現在、設置準備中)

研究環境・次世代教育担当ワーキンググループ

科学政策提言戦略ワーキンググループ

日本分子生物学会 賛助会員一覧

(2012年2月1日現在)

アサヒビール株式会社 食の基盤技術研究所
株式会社エー・イー企画
沖縄科学技術大学院大学
科学技術振興機構 バイオサイエンスデータベースセンター
科研製薬株式会社 創薬研究部
協和発酵キリン株式会社 研究本部研究推進部
株式会社コクサン
コスモ・バイオ株式会社 開発部
ジャスコインタナショナル株式会社 第二事業部営業一課
住友化学株式会社 健康・農業関連事業研究所探索生物グループアグリバイオ
第一三共株式会社 抗体医薬研究所
タカラバイオ株式会社 事業開発部
武田バイオ開発センター株式会社 プロジェクトマネジメント部
株式会社ダスキン開発研究所
田辺三菱製薬株式会社 研究本部研究企画部
東洋紡績株式会社 ライフサイエンス事業部
株式会社トミー精工
ナカライテスク株式会社 技術営業部広報課
日本甜菜製糖株式会社 総合研究所第二グループ
日本ベクトン・ディッキンソン株式会社 BD バイオサイエンス
日本たばこ産業株式会社 植物イノベーションセンター
日本たばこ産業株式会社 たばこ中央研究所
株式会社ハイテック
浜松ホトニクス株式会社 システム営業部
富士レビオ株式会社 研究開発部門研究支援グループ
フナコシ株式会社
株式会社ボナック
三菱化学株式会社 RD 戦略室
ヤマサ醤油株式会社 R&D 管理室
ライフテクノロジーズジャパン株式会社
ロシュ・ダイアグノスティックス株式会社 AS 事業部
湧永製薬株式会社 湧永満之記念図書館
和研薬株式会社 大阪センター営業推進部

〈50音順〉

■日本分子生物学会第12回春季シンポジウムの公式サイトが公開されています。

URL: <http://www.mbsj2012.umin.jp/>

■第35回（2012年）日本分子生物学会年会ホームページが開設されました。

URL: <http://www2.convention.co.jp/mbsj2012/>

特定非営利活動法人

日本分子生物学会 事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-11-5

人材開発ビル4階

TEL: 03-3556-9600 FAX: 03-3556-9611

E-mail: info@mbsj.jp

Genes to Cells

Published on behalf of the Molecular Biology Society of Japan

Edited by: Mitsuhiro Yanagida

Frequency: Monthly | Impact Factor: 2.889

日本分子生物学会の学会誌Genes to Cellsは、分子生物学の優れた研究成果を掲載し、著者にとって有益な学術情報や、先見性の高い最新の研究情報を提供しています。全世界で4,000以上の機関で読まれており、年間12,000件以上のダウンロード数を誇ります。是非Genes to Cellsにご投稿ください。

Genes to Cells 投稿の利点

- わかりやすく便利なオンライン投稿システム
- 出版までの過程をお知らせするAuthor Servicesをご利用いただけます
- 早期出版EarlyViewサービスにより、最新号への掲載を待たずにオンラインで出版されます
- 出版後6カ月経過した全論文が無償公開となり、世界中からアクセス可能になります
- 出版されると直ちに無償公開となるオープンアクセスオプション『OnlineOpen』（有料）をご利用いただけます

オンライン投稿はこちら
<http://mc.manuscriptcentral.com/gtc>

2010年出版 引用数TOP 論文 *2011年12月末現在

p62/SQSTM1 cooperates with Parkin for perinuclear clustering of depolarized mitochondria (Volume 15, Issue 8)
Okatsu, K; Saisho, K; Shimanuki, M; Nakada, K; Shitara, H; Sou, Y; Kimura, M; Sato, S; Hattori, N; Komatsu, M; Tanaka, K; Matsuda, N

Selective autophagy regulates various cellular functions (Volume 15, Issue 9)
Komatsu, M; Ichimura, Y

Structural insight into the membrane insertion of tail-anchored proteins by Get3 (Volume 15, Issue 1)
Yamagata, A; Mimura, H; Sato, Y; Yamashita, M; Yoshikawa, A; Fukai, S

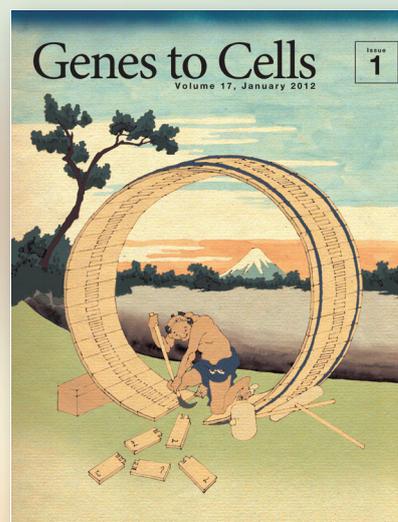
ジャーナル閲覧ページ

www.wileyonlinelibrary.com/journal/gtc

日本分子生物学会の会員はオンラインジャーナルに無料でアクセスしていただけます。
ユーザー登録は学会事務局までお申し込みください。
日本分子生物学会事務局: info@mbsj.jp

登録後のアクセスに関するご質問は、
Wiley-Blackwellカスタマーサービスにて承ります。
Wiley-Blackwellカスタマーサービス: cs-japan@wiley.com

 WILEY-BLACKWELL



The Molecular Biology Society of Japan NEWS

日本分子生物学会 会報

(年3回刊行)

第101号 (2012年2月)

発行——特定非営利活動法人 日本分子生物学会

代表者——小原 雄治